

隊兵トエレコヨチ  
のウヨシ・ドアナバ  
劇喜幕三的道士武非

譯 孝 庭 伊



特

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始

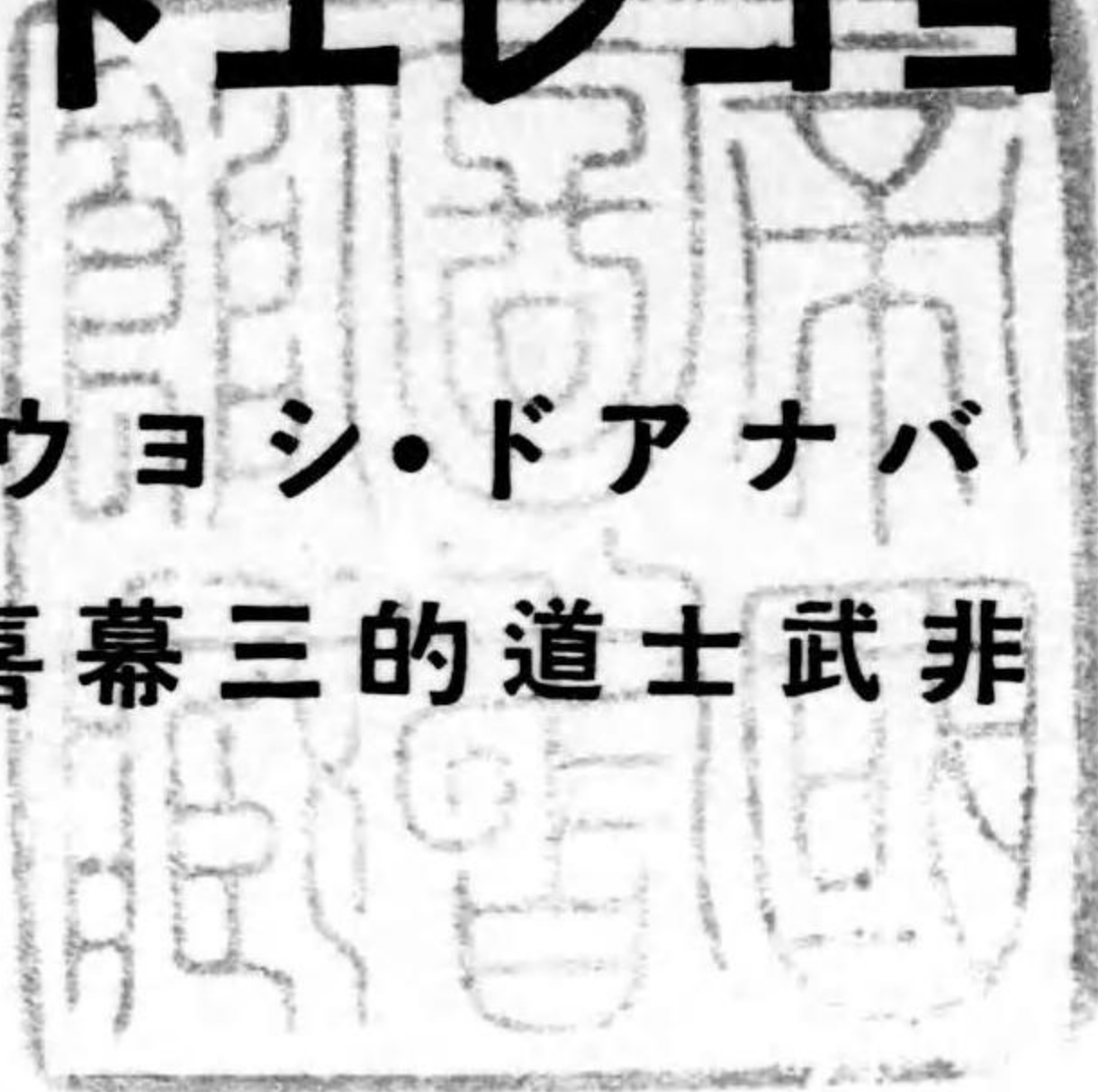




特103  
329

# 隊兵トエレコヨチ

作ウヨシ・ドアナバ  
劇喜幕三的道士武非



三 - 九 -

部板出社劇新 京東・譯 孝庭伊





少佐ペトコフ

ニコラ

少佐サアヂヤスサラノフ

大尉ブルンチユリイ

カザライン・ペトコフ

ルウカ

ライナ

ブルガリヤ國ドラゴマン峠に近き

小邑なるペトコフ少佐邸内

一八八五年十一月—一八八六年三月



## 第壹幕

夜。若い婦人の寢室。小さいバルコニーの附いた窓が明放しになつてゐて、バルカン連山の雪が、白く美しく光つて、實際は遠方にあるのだが、それが手近に見える。室内の装飾は東ヨーロッパの風ではなく、半分はブルガリヤ風の贅澤なものと、半分はウキン風の安直なものである。部屋の一角を斜に爲切つた壁の側にある寢臺の枕の方には、藍色と金色とに塗つた、木の厨子があつて、象牙の基督像が置いてある。其前には弔燈籠があつて、火がついてゐる。座席の中心になつてゐるオットマン（土耳其風の輪環を爲せる腰掛）が、部屋の今一つの側に据ゑてあつて、窓と向ひ合つてゐる。寢臺の覆でも、總飾ぶさでも、窓掛あしじきでも、足敷あしじきでも、装飾の織物は凡て東洋風で立派であるが、壁紙は西歐風の安つばいものである。オットマンと窓との側にある手水臺には、白磁しろみをかけた金盥しろみを載せ、其下には彩色した鐵の臺があつて、水桶が置いてある。横側の手擦には一枚きり



の手拭がかけてある。其傍の椅子はオオストリヤ製の曲木で、据わる處は籐で出来てゐる。寢臺と窓との間にある化粧机は普通の松製で、複雑な色彩の切で覆ひ、上等な鏡が置いてある。寢臺の側にドアがあり、其間に箆筒がある。箆筒もやはり複雑な色彩の國風の切で覆うてあり、其上に紙表紙の小説本が數冊と、チヨコレエト・クリイムの箱と、立派な若い士官の大きな寫眞が、小ひさな寫眞かけに載せてあるのがある。其士官の堂々たる風采と、人を引つける眼付とは、寫眞にも見えてゐる。箆筒の上と化粧机の上とにある蠟燭が、此室を照らしてゐる。化粧机の上にはマツチが一箱のせてある。

2

窓は觀音開きになつてゐて、明け廣げてある。其外向の木造の雨戸も明放になつてゐる。バルコニーには一人の若い婦人が、此夜景色の夢のやうな美しさど、自分も其美しさの一部である事を充分に意識して、バルカン連山を眺めてゐる。婦人の着てゐる長い毛皮の外套は安く見積つても、この部屋の道具よりも三倍の値打の代物である。

此婦人の母親のカザライン・ペトコフの呼聲で、婦人の空想は破られてしまつた。母は四十臺の、精力の充満した女で、髪も眼も黒い。山農の妻などには立派な雛型だが、當人はどこまでもウキン式婦人だときめ込んで、さう見せる爲めに如何なる場合にもテイガウン（上流婦人が寢起ねおきに着する緩和なる服）を着てゐる。

## 第 壹 節

3

カザライン「吉報を知らせやうといふので急いで端入つて来て」

ライナ。「此婦人はライイナミイに力を入れて呼ぶのが癖である」ライナ。「ライナが其處にゐるつもりで寢臺に近づき」おや、何處だらう。「ライナは窓から中を覗き込む」あら、お前はまだ寢ずにて、夜風に當つてゐるのかい。死ぬやうな病氣にとりつかれますよ。ルウカはお前がもう寢たやうにいつてゐたのに。

ライナ「部屋に端入りながら」



ルウカはあつちへやりました。ひとりきりでゐたかつたのですよ。それは星が綺麗なのよ。何かどうかして。

カザライン

大變な知らせだよ、戦闘があつたんだよ。

ライナ「大きな目をして」

へええ。「オットマンの上へ外套を投出して、寢間衣一つで母の傍へ寄る。此寢間衣は美しいのだが  
着物はそれ一枚きりしか着て居ない事がわかる」

カザライン

スリブニツツアで大きな戦闘があつてね、大勝利だつたよ。しかもそれがあの  
サアヂヤスの手柄なんだよ。

ライナ「嬉しそうに叫んで」

へええ。「夢中になつて」まあ、お母さん。「やがて急に不安さうに」でもお父さんは御無  
事でせうか。

カザライン

あたりまへさ。お父さんから知らせておよこしになつたのも。サアヂヤス  
は其戦闘では身方の大立物で、皆が崇拜してゐるのだと。

ライナ

よ、話して頂だいよ、話して頂だいよ。どうしたんですつて。「まだ夢中になつて」ね  
え、お母さん、お母さん。「母をオットマンの上へ押付けて、互に狂氣のやうに接吻する」

カザライン「熱心をこめて」

そのすばらしさといつては、お前などには到底も分るものではない。騎兵の  
唎喊さ、ねええ。サアヂヤスは指揮官のロシア人などに關はずに、命令を俟たず  
やつたのだよ。責任は自分が引受けて、先登に立つて、真先に敵の砲兵隊へ躍り  
込んだのだつて。わかつたかい、ライナ。身方の勇ましいブルガリヤ人が、劍を  
光らせ、眼を光らせて、なだれのやうに攻込んで、役に立たない敵のセルビヤ人  
や、氣取屋のオオストリヤの士官を、木葉こはのやうに追ひまくつてしまつたんだ



よ。それだのにお前といふ人は、サアヂヤスに結婚を承知する迄に、一年も待たせたりしたよ。もしお前の軀にブルガリヤ人の血が通つてゐたら、あの人が歸つて來たら、今度は拜まなくてはならないよ。

ライナ

軍隊中で喝采されたといふ後で、私なんかが拜んだつて、何とも思はないでせう。だけれどいいわ。私うれしいわ、肩身が廣いわ。「立ち上つて興奮してあちこち歩く」やつぱり私達の想像が本當になつたわね。

カザライン「むつきして」

想像が本當になつたえ。何のことをいつてゐるのだい。

ライナ

サアヂヤスがするだらうと思つてゐた事よ。愛國心よ。勇ましい事よ。私はそんな事は空想なんだらうと思ふ事もあつたのよ。娘といふものは、随分人を信用しないわね。サアヂヤスに劍をつけて上げたときに、あの人は本當に立派に

見えましてわ、失望だとか、讓歩だとか、失敗だとかいふ事を思つては申分がないわ。けれども、けれども「早口」きつとあの人にはないでせうね。

カザライン

何をいはないのだから、其事をいはないうちは分るもんかね。

ライナ

あの人が私を抱へて、私をぢつと見つめたときに、私は一寸かういふ事を思つたの。私たちはバイロンやプシキンを愛讀するし、ブカレストでつひ前の季節に見たオペラが本當によかつたし、そのせいで勇士といふやうな事を考へるのぢやないかと思つたの。実際にはそんな者はあるものではないといふ考だつたわ。「後悔にたへず」かうなのよ、お母さん、私實は疑がつてゐたのよ。あの人が勇士らしいとかいつても、實際の戦いくさに出て見ると、想像だけの事なのではないかと思つてね。機敏なロシア士官たちの目の前で、見つともない事をするのではな

いか知らぬと。



## カザライン

見つともない事。馬鹿をお言ひでない。セルビヤの方にだつて、ロシヤ人に敗けない利巧なオオストリヤの士官が附いてゐますよ。それでもこつちはこの闘たたかひにも向を敗かしてゐるのだよ。

ライナ「笑つて、又腰を下ろし」

随分私も色消いろけしな憶病者ね、皆思つてゐた通だと思ふと堪らないわ。サアチャスは見掛通りな立派な勇ましい人だわ。世の中の立派なものを見られる女や、理想を實現する事の出来る男には、世の中は本當に立派な處だわね。おお嬉しい。本當に口にははれない嬉しい實現だわ。「母の側へ跪いて、情をこめて抱きつく途端に女中のルウカが端入つて来るので腰が折れる。ルウカは顔の美しい、高慢な娘で、綺麗なアルガリヤの郷土服に、ダアル・エパンをかけてゐる。ライナに對する態度は不遜と思はれる程高ぶつてゐる。此女はカザラインを畏れてゐるが、やる丈けはやつつける。二人と同様に興奮してゐるが、ライナの夢中になつてゐるのには少しも同感を持つて居らぬ。二人の様子を輕蔑しながら見て、それから話しかけ」

## 第一節

## ルウカ

奥様。窓も雨戸もびつたりしめた方が宜しうございませう。往來で射撃が始まるさうでございますよ。「カザラインミライナは同時に驚いて立上る」セルビヤ人が此峠を追討されるんで、此町へ逃込んで来るかも知れませんがございませう。こちらの騎兵がその後を追かけるのでございませう。町の人もその積で居りますの。今丁度逃げて居りますよ。「バルコニイに出て雨戸を引寄せて、それから部屋へ戻る」

## ライナ

身方の方があまり惨い事をしなければいいがね。逃げる者を殺したつて、何が名譽になるものか、ねえ。

カザライン「家事取締の本能が活動し始めたので、實務的に」

下の方は大丈夫かどうか、私は見て來なくてはならないね。



ライナ「ルウカに」

騒が始まつたら、直に私に雨戸がしまる位に寄せて置いてお呉れね。

カザライン「戸口へ行きかけて、振返つて、命令的に」

いやいや、雨戸はかき金を下してお置き。お前は明けたまま寝こんでしまふから。ぴちんと下してお置きよ、ルウカ。

ルウカ

はい。「雨戸をちやみん閉ぢる」

ライナ

私の方は心配しないで頂だい。鐵砲の音がしたら蠟燭を消して、床の中へ潜り込んで、耳を塞いでゐますから。

カザライン

それが一番伶俐だよ。お休み。

ライナ

お休みなさい。「互に接吻する。ライナの感情は即刻奮に還つて」私生涯にこんな嬉しい晩はないんだけれど、逃亡兵さへなければ。

カザライン

お寝なさいよ。そんな事はお考へでない。「出て行く」ルウカ「そつとライナに」雨戸を明けてお置きになりたければ、一寸かういふ風にお押になると宜いのですよ。「雨戸を押して明けて見せて、すぐしめて」片方かたかたを下でかはなくつちやいけないですけれど、ころが取れてゐるのです。ライナ「威嚴をもつて叱つて」いいよ。しかしね、いひ付けられたやうにしなければなりませんよ。「ルウカは顔をしかめる」お休み。ルウカ「氣のない聲で」お休みなさいまし。「息張つて出て行く」



## 第三節

## ライナ

「ライナは一人残されて、筆筒の側へいき、あらゆる表情を超越した感情をもつて、寫真に見蕩れる。それに接吻するさか、胸に押當るさか、或は又肉體的の愛情を示す行爲はしないのである。が、それを両手にさつて、尼の祭司がするやうに、高く差上げてゐる。寫真を見上げながら。」

私はもうあなたの妻にふさはしくない事は致しません。決して、決して、決して。

12

「恭しく寫真を舊へ戻して、本の積重ねてある中から小説を一冊撰り出す。うつさりして頁を繰つて目あての處を見出した。其頁で本を外へ折返し、嬉しげな吐息をして、床の中へ端入つて、讀みながら寝ようとする。然し讀み耽る前に嬉しい現實を思ひ出して、眼をあげて獨言に」おお、勇士。おお、勇士。

「遠方の銃の音が夜の静さを破る。ライナは耳をすまして聞くさ、又二發すつゝ近くに響くので、驚いて寢臺から這降りて、急いで筆筒の上の火を吹消す。それから耳へ指をあて、化粧机の上の火も消す。そして暗闇の中を急いで寢臺に歸る。聖像の前の弔燈籠の火さ、雨戸の上側の溝から差込む明あかりの外には何一

つ見えない。銃聲が又聞える。一齊射撃の音が直傍にひびく。其響の消えぬうちに、雨戸を外から引く者があつて、雨戸が外へ開いた。するさ雪のやうな星明かすがたが角形に指込んで、男の黒法師が其中に顯れる。雨戸は直にしまる。部屋は復暗闇になる。人の喘々音がする。やがて物を擦る音がして、部屋の其中にマツチの燭がひかる」

## 第四節

## ライナ「寢臺の上にかぐんで」

誰です。「マツチは消える」誰です。誰なんです。

男の聲「闇の中で、抑へ聲で、しかし毅然と」

しつ、しつ。聲を出さずに。撃ちますよ。じつとして。ごうもしません。「ライナが寢臺を離れて、ドアの方へ行くのを聞きつけて」お待ちなさい、逃げようとしても駄目ですよ。聲を立てると弾が飛ぶんですぞ。「命令的に」明あかりをつけて、顔をお見せなさい。「ライナが化粧机へ引退る間、暫らく静かな暗闇である。ライナは蠟燭に火をつける。秘密はすつか



り分る。男は三十五歳位で、泥と血と雪とに塗れて、はじめな有様をして、胴締とピストル入の革紐とでセルピヤ砲兵士官の着る藍色の上衣の裂け目を結び合せてゐる。蠟燭の光で照らされて、其汚れ放題になつてゐる状態から見受けた處では、此男は中背で、頑丈な顔附の、肩幅の廣い、平凡な人相の男である。圓くて頑固さうな頭は、縮れた青銅色の髪の毛で被はれてゐる。青い素早い眼、立派な眉と口。執拗な嬰兒に見るやうな、取柄のない平凡な鼻。軍隊的の舉止。元氣に満ちた動作。絶體絶命の間にも、機才を縦横に働かせようとして、而も今の場合を寧ろ滑稽の感を抱いて觀てゐるが、然し充分慎重な態度をこつて、其爲めに大事を爲損じるやうな風はない。一目でライナの年配、社會上の地位、性格、どれ程おびえてゐるかを看てしまひ、丁寧ではあるがきつぱりした處を失はずに「御免下さい。お騒がせして誠に済みません。この軍服は御存じでせう。セルピヤです。攫まれば殺されるのです。」「嚴かに」お分りになりましたか。

14

ライナ

ええ、

男

そこで遁れられる限り殺されたくないのです。「更に怖ろしい聲で」その事が分りますか。「ドアを閉ぢる」

ライナ「蔑んで」

分らないようです。「そり返つて男の顔を見つめ、一語一語に力を入れて」軍人にも随分死ぬのをこわがる人があります。

男「皮肉に」

皆さうなのです、皆です。なるだけ長く生きてゐるのが我我の義務なんです。それだから、若しあなたが大きな聲を立てれば。

ライナ「遮つて」

私を撃つのでせう。死ぬのを怖がつてゐる私だと思つて。

男「狡猾さうに」

それでは私が撃たなかつたとしたら、ごういふ事になるでせう。あなたの方の一番ならず者の騎兵が、この綺麗な部屋へ飛び込んで来て、豕のやうに私を殺す

15



でせう。私は鬼のやうに行り合ひます。町中へ引張出されて、あいつ等のおもちやにされてたまるものですか。あいつ等の爲る事は分つてゐます。處であなたは今の其なりで、奴等を此處へ引入れやうといふお積ですか。「ライナは寝間衣に急に氣がついて、身慄して、身つくらふ。男は其を見ながら構はずに」人前へは出られませんでせう。「ライナはオットマンの方へ行かうとする、男はピストルを指向けて叫ぶ」お待ちなさい。「ライナは立止る」何處へ行きます。

ライナ「嚴かに、氣を落着けて」

外套を取りに行くだけです。

男「足早にオットマンに走り寄つて外套を掴み取つて」

これはいい。外套は私がお預りします。それからあなたはあなたで、人が端入つて来て、外套もなしであるのを見られないやうになさい、こいつはピストルよりも好い武器だ。「ピストルをオットマンの上へ投出す」

ライナ「怒つて」

それは紳士の武器ではありません。

男

あなたの御料簡次第で男が死ぬのです。その男にはこれが結構な武器です。「ミ顔を見合せる。ライナはセルピヤの士官でも、よくもかう皮肉な勝手な非任侠的な人間がゐたものさ、呆れかへつてゐる。途端に烈しい一齋射撃の音が往來に聞えるので、兩人驚く。當面の死の怖しさに男は聲を潜めて」ようござんすか。あのならず者に私を引渡すといふ事になると、あなたはそのなりで奴等をもてなさなければなりませんよ。「ライナは輕蔑の眼で男を見つめる。男は突然びくさして耳を欬てる。室外に足音がする。誰かドアをがちゃ／＼やつて、やがてせわしく叩く。ライナは息もつかずに男の顔を見る。男は人が進退谷つた時にするやうな動作をして、今までのライナを威してゐた態度をやめ、外套をライナの方に投げて眞面目に親切に」いかん、もう駄目です。これをお着なさい。やつて来ましたよ。

ライナ「無言で外套を掴んで」

有り難う。「助かつたさいふ風をして外套を着る。男は劍を抜いてドアに向いて構へる」



ルウカ「外で叩きながら」

お嬢様、御嬢様。早く起きてドアをお明けなさいまし。

ライナ「心配して」

あなたどうするおつもり。

男「すごい顔をして」

おかまひなさるな。どいていらつしやい。手間は取りません。

ライナ「衝動的に」

どうかしてあげませう。お隠れなさい、さあ早く。カアテンの後に。「男の千切れた袖の端を引張つて窓の方へ行く」

男「ライナに引かれて」

あなたがしつかり行つて下さればまだ運があるんです。よござんすか、軍人といふ奴は十人が九人までは、生れ付の馬鹿ですからね。「窓掛の後へ隠れたが、顔を出して見付かつた時には、盲滅法に打ち合ひます。」「隠れる。ライナは外套をぬいで寢臺の足のむ

へ投げ、れむいのを起されたさいふ振をしてドアを明ける。ルウカが息をはづませて端入て来る」

第五節

ルウカ

男の人が樋を傳つてこのバルコニーへ登つたんですつて。セルビヤ人です。こつちの兵隊さんがそれを探さうといふんです、皆亂暴で、酔つてゐて、怖いんですよ。奥様が直に御召を召さなくちやいけませんて。

ライナ「起されたので機嫌を悪くしたやうに」

ここは探しやしまいよ。なんだつて家へ入れたんだらう。

第六節

カザライン「急いで端入つて来て」

ライナや、大丈夫かい。誰も来やしなかつたかい。何も音は爲なかつたかい。



ライナ

鐵砲の音はしましたよ。まさか兵隊は此處へは端入つて來やしないでせうね。

カザライン

幸にロシアの士官が兵隊の中に入れてね、その方はサアチャスを知つてゐるのだつて。〔室外に〕さあ、どうぞお端入り下さい。娘が御目にかゝります。〔アルガリヤの軍服を着た若いロシアの士官が劍を攫んで端入つて來る〕

## 第七節

士官〔柔和な猫撫聲で、しかも軍隊式の堅苦しい姿勢で〕

御令嬢、今晚は。突然で失禮ですが、實は敵の逃亡兵がこのバルコニーに隠れてゐるのであります。誠に濟みませんが、其者を搜索する間、あなたも奥様も暫時御退席を願へませんかですか。

ライナ〔氣短に〕

何を仰有るんです。御覽なさい、バルコニーには誰一人ゐやしません。〔ライナは兩戸を廣く明け擴げ、男の隠れてゐる窓掛の方を背にして、月光のさしてゐるバルコニーを指す。丁度窓下で二發發砲する。一發はライナの向いてゐる方の窓ガラスに中る。ライナはあつと云つたが、其儘立つてゐる。カザラインは叫ぶ。士官は注意せんか、と叫び乍らバルコニーへ飛び出る〕

士官〔バルコニーから街上へ響聲を出して〕

おい、發砲を止める、馬鹿、分らんか。發砲を止める、畜生。〔下を睨めてゐたが、舊の町寧な態度に還つてライナに〕もしやあなたのお氣の附かんに此處へ登りはしませんでしたか。あなたはおやすみでしたか。

ライナ

いいえ、まだ床へ端入つてゐませんでした。

士官〔室内へ戻つて來て、性急に〕

この邊の者はセルビアの逃亡兵で頭が一杯になつてゐます。それで何處にもゐると云ふのです。〔可寧に〕誠に濟みませんでした。お休みなさい。〔軍隊的の禮。ラ



イナは冷かに答禮する。士官はカザラインにも同じく禮をして出て行く。カザラインはついて行く。ライナは兩戸をしめて、この有様を不審さうに見てゐたルッカに」

ライナ

兵隊たちがここにゐる間は、お母さんについておいで。「ルッカはライナを見、オットマンを見、窓掛を見て、秘密さうに口をすぼめて出て行く。此態度を見てライナは心持を悪くしてドアをパタリとしまつて、手荒に錠をかける。男は直に窓掛の後から出て来る。劍をしまつて、そして爲事を済した時のやうに、危険の事は念頭から忘れてゐる」

## 第八節

男

際ごい處。ともかく助かつたに違ひありません。お嬢さん、死ぬ迄忘れませぬよ。私はあなたのやうな方がゐるのなら、セルビヤの方に行かずに、ブルガリヤの方に來ればよかつたと思ひますね。私はセルビヤ生れではないのです。

ライナ「傲然」

さうです。あなたはオオストリヤ人で、セルビヤ人を煽動して、私の國の自由を奪ふ戦<sup>いくさ</sup>を起させて、そしてセルビヤ軍隊を指揮してゐるんです。オオストリヤ人は私たち大きらひです。

男

オオストリヤ人。違ひます。私を嫌ふ事はないのです。お嬢さん、スキツツル人です。兵隊を商賣にしてゐて戦争に出るのです。セルビヤ軍隊に加はつたのは奴等が最初にスキツツルを通つてやつて來たからです。大目に見てやつて下さいよ。それでなくてもあなたの方は私どもの方を滅茶滅茶にやつつけましたよ。

ライナ

私が大目に見てゐないつて。

男



それは實に見上げたものです。しかし私はまだ助かつてはゐません。今やつた騒ぎはやがてすむでせうが、追撃が今夜中おつかけおつかけあるでせう、静なうちうまく脱け出さなくてはなりません。それにしても今少しここにゐてもさし支ないでせうか。

ライナ

ええ、ええ。だけれど可哀相ね。あなたはもう一度危ない處へいかなければならないの。「オットマンを指して」あなたお掛けなさい。「と言ひかけて、ピストルお置いてあるのを見て思はず叫ぶ。男もびつくりして、馬の驚いたのやうに飛び退く」

男「怒つて」

おごかしてはいけませんよ。一體何です。

ライナ

あなたのピストルよ。あれが始終あの士官の目先にあつたのよ。よかつたわねえ。

男「つまらない事にびつくりしたので少してれて」

ああ、それですかい。

ライナ「愈々意氣地のない男を見て益々安心しだして、横柄な位に男を見つめて」

おごかしてお氣の氣でした。「ピストルを渡して」さあ、これで私を防いで御覽なさい。

男「ライナの譏刺を聞いて氣だるさうに笑ひ、ピストルを受取つて」

役に立たないんですよ。何も端入つてゐないんです、弾は込めてないんです。

「ピストルを見て顔をしかめて、ピストル入の中へ無雑作に入れる」

ライナ

そんなら何でも宜いから弾をお入れなさい。

男

弾はないんです。戦争に弾が何になるものですか。私はいつも弾の代りにチヨコレエトを持つて行きます。それもどうに平げてしまひましたよ。

ライナ「男子を云ふものに對して考へてゐる大切な理想の立場から大に怒つて」



チョコレエト。ポケットにお菓子を入れていくのですつて。學校の子供のやうに。戦地にゐてて。

男「ひもじさうに」

今少しでもあるといいな。「ライナは何とも云ひ様がなくて男を見つめてゐる。やがてぶつぶついひ乍ら單筒の側へ急いで行き、菓子箱を持つて来る」

ライナ

失禮。お氣の毒ですが喰べてしまつて是だけです。「箱を指出す」

男「ががつして」

あなたは天の使です。「菓子を頬張つて」クリームです、ね、素敵だ。「もつこないかこのぞく。ない。止むを得ず諦めて、機嫌よく有難さうに」ごうも有り難う。軍人の歳はピストル入と弾入とで分ります。若い奴はピストルと弾とを持つてゐるが、歳とつた奴は食べ物です、有り難う。「箱を渡す。ライナは輕蔑したやうに其をもぎとつて、遠くへ投げる。男はライナが打つのかと思つたか、又叫ぶ」ひゆう。出抜けにやつてはいけませんよ。今

し方私がおどかしたんで、其意趣返をしやうといふのですね

ライナ「大風に」

私をおどかしたんですつて。私は女でもあなた位の勇氣はありますよ。

男

さう思ふでせう。けれどあなたは三日三晩鐵砲玉の下にゐたのではないのですからね。私も二日位はごうにか辛抱しますけれど、三日續いては誰でもたまりません。鼠のやうに臆病になつてゐますよ。「オットマンにかけて、両手で頭を支へる」私の泣く所が見たいのですか。

ライナ「びっくりして」

いいえ。

男

泣かして見たければ、乳母が子供を叱るやうに叱れば宜いのです。隊にゐれば今頃は皆に色々な悪さをされるんです。



ライナ「少し可哀相になつて」

可哀相ね、叱りはしませんよ。「男は同情の言葉を聞いて首を擡げて、嬉しそうにライナを見上げる。ライナは忽ち氣を締めて」御免なさいよ、ブルガリヤの軍人はあなたのやうではありませんよ。「ミオットマンから遠ざかる」

男

なあに同じ事です。兵隊には歳をとつた奴に、若い奴と二色しかないのです。私は十四年も兵役をしたものです。あなたの國の軍人の半分は火藥の臭をかいた事もないのです。それなのに今度の戦いくさにどうして勝つたか。丸きり戰術を知らないからです、それ以外にありません。「侮蔑したやうに」今迄あんな素人くさい戦争を見た事はありません。

ライナ「反語的に」

あなた方に勝つたのが素人くさいの。

男

まあ、かうですよ。機關砲隊の一齊射撃に向つて、騎兵聯隊が吶喊をやるなんて、本職のする事ですか。彈が飛べば死ぬにきまつてゐます。人だつて馬だつて五十メートルの處迄でやられてしまひます。あれを見た時はどうしても本當とは思へませんでしたよ。

ライナ「軍人に對する熱心や夢想が沸返つて來たので一心に男の方をむき」

あなたはその壯んな騎兵の吶喊を見て。さあ、それを話して下さい。精しく。

男

あなたはまだ一度も騎兵の吶喊を見た事がないんでせうね。

ライナ

當り前よ。

男

さうでせうね。それは實に滑稽なものです。丁度豆を一攫窓へぶつけるやうなもんです。一人眞先にやつて來る、すぐに二三人くつついて來る。それから後あと



の奴が一塊になつて來るのです。

ライナ「眼を圓くして組み合せた手を夢中で指上る」

さうよ、その眞先の一人。それが一番の勇士だわ。

男「少しも感ぜずに」

ふむ。その馬鹿者がしきりに馬を引止めてゐる處を見せて上げたいね。

ライナ

なせ馬を引止めるの。

男「あまりの愚問でうるさいいふ風に」

馬が一所に駆け出すからですよ。他の者より先に出かけて行つて殺されたい奴がありますか。そこで皆がやつて來るのですね。若い手合は無鐵砲な事をやるから直に分ります。歳のいつた奴等は先登を掩護物にして塊まつてやつて來ます。自分達はつまり散弾がはりなんだから、戦ふがものはないと思つてゐるのです。怪我は大抵膝の骨を挫くのです、馬がお互に打つかり合ふのでね。

ライナ

へええ、だつて先驅さきがけの人が臆病者だとは思へませんね。其人こそ勇士ですわ。

男「機嫌よく」

けふの呐喊の先登のやうなのを御覽になると、さういふ風に仰有るでせうよ。

ライナ「男の失禮は忘れて息もつかずに」

知つててよ、話して下さいな、その人の事を。

男

その男の態度は先づオペラのテノルです。詠向の好い男です、光る眼の、美事な口髭の。そいつがおめき叫んでドンキホテが風車に呐喊したやうな勢で來たものです。私等はそれを見て吹き出したんですが、丁度其時こつちの軍曹が眞蒼になつて驅けて來て、大砲の弾を間違つて送つて來たから、十分たたなければ發砲出來ないと云つたんで、笑ひ事ではなくなつたんです。今迄一度や二度は危い目にも遇つたんですが、あんな弱つた事はありませんでしたわ。ピストルの弾



さへないんで、あるのはチヨコレエトばかり。銃剣も何もないんですよ。それだから敵は散散に斬りまくつたのです。そこで例のドンキホテは得意になつてわめき廻つたのです。其實は軍法會議に廻されるやうな事をしてゐるんですけれど、我一人の手柄をした積かなんかであつたものです。戰場へ追放された馬鹿者のうちで、あいつこそ一番の氣違野郎です。奴と部下の聯隊とはつまり自殺をしようとしたんです。ただピストルの弾が出なかつたといふだけの事なんです。

ライナ「ひどく侮辱せられて感じたが、猶理想を固執して」

さう。顔を見れば今でも其人を覚えてゐて。

男

どうして忘れるものですか。「ライナはまた箆箭の方へ行く。男は又食物でも呉れる位に、ほんやりした望を抱いてライナを見送つてゐる。ライナは寫眞を外して持つて來て男に渡す」

ライナ

この寫眞の紳士は、愛國者でもあり勇士でもある、私の言名付いひなづけの方なの。

男「其の男だぞ知つてびつくりして」

これはどうも失禮しました。「ライナを見て」これまで言はせるのは宜くありませんね。「再び寫眞を熟視して」さうです、この人です、大丈夫。「笑ひかけて押へる」

ライナ「すぐに」

なせ笑ふんです。

男「面目なさうに、しかも益々おかしくなつて」

笑つたではありません。その積ではなかつたのです。だがこの人が風車に咄喊してゐながら、一番の手柄をした積になつてゐて。「笑を慄へてむせる」

ライナ「厳しく」

返して下さい、寫眞を。

男「本當に悪いと思つて」

はい、はい。どうもすみません。「ライナは恭しく寫眞に接吻して男の顔を覗みつけて、寫眞を箆箭の上へ置き直す。男はついて行きながら」どうも私が考へ違をしてゐたやうです。確



にさうです。これはどうしてもあの人が弾丸の一件を聞込んでゐて、安全だといふ事を知つてゐたのでせう。

ライナ

するさあの方は取りも直さずまやかし者で、卑怯者だといふ事になります。さつきはさうは言はなかつたではありませんか。

男「困り果てたさいふ滑稽な動作をして」

困りましたねえ。本職の立場からお話してゐるのだが、それがお分りにならないですな。「オットマンに戻らうとする途端、新らしく遠くて銃の音がする」

ライナ「其音に耳をすましてゐる男を見ながら酷しく」

分らないのが結句あなたの爲合しあはせです。

男

どうして。

ライナ

あなたは私の敵でせう。そして私の手の中にあるのです。もし私が本職の軍人だつたらどうしたと思ひます。

男

いかさま、お嬢さん。全く仰しやる通です。あなたの下すつた事はよく分つてゐます。あのチヨコレトクリウム三つは死際まで忘れませんよ。軍隊的の行ではなかつた。そして天の使の行でした。

ライナ「冷かに」

どう致しまして。ぢや今度こそは軍隊的の行をします。あなたは私の夫になる人をあんな風に仰しやつた以上は、此處にお置き申すことは出来ません。バルコニーへいつて見て來ませう、今あなたが往來へおりていつても大丈夫かどうか。

「窓の方へ行きかける」

男「顔色をかへて」

あの樋を傳つてですか。一寸。待つて。いけません。駄目ですよ。思つたばかり



りでもくらくらします。さつきは死物狂だから登つたのです。今のやうに落着いて来てはとて。【オットマンの上にぐたりとなつて】駄目です。もうおしまひです。参つてしまつた。大きな聲をお立てなさい。【全くがっかりして両手で頭を支へて】

ライナ「可哀さうになつて態度をかへて」

さあ、氣を落してはいけませんよ。【母親のするやうに俯向いて覗き込む、男は頭を振る】まあ、あなたは本當に氣の毒な軍人ね。チヨコレエト兵隊よ。さあ、しつかりなさいよ。つかまるよりも樋をおりる方が宜いわ。ね、さうよ。

男「うつむきしてライナの聲を聞きながらねむくなつて」

いや。つかまれば死ぬだけの事です。死ぬのは眠るのです。眠るのです。ねむ、ねむ、ねむ、樂にねむるのです。樋をおりるのは爲事です。一生懸命で。死ぬ方が十倍も増ましです。

ライナ「疲れ切つた聲の高低を聞きながら、靜かに、不思議さうに」  
そんなになむいの。

男

戦争に出てから二時間とは本當に寝ないのです。私は參謀部にゐるのです。さういつた處であなたには解るまい。四十八時間といふもの眼をそぢないのです。

ライナ「策の施しようがなくなつて」

ではあなたをどうしたら宜いのでせう。

男「此の絶望の聲で目を覺まして立上り」

無論自分でどうにかします。【身慄をして身を引立てて元氣を奮ひ起して言ふ】寝てゐやうが、腹がへつてゐやうがへつてゐまいが、疲れてゐやうが、爲なければならんと思へばやれる。とにかく樋からおられるのだ。【ミ胸をたたいて】よしか、チヨコレエト兵隊さん。【窓の方へいく】

ライナ「心配して」

でももし落こちたら。

男



敷石を羽根蒲團と思つて寝ませうよ。さよなら。「大膽に窓に歩み寄り、雨戸に手をかける。途端に激しい射撃の音がひびく」

ライナ「駆けよつて」

お待ちなさい。「暗雲に男を攫まへて引廻して」死にますよ。

男「冷静に、而も確乎として」

お構ひなさるな、こんな事は私等の商賣です。運まかせでやらなければならぬのです。「きつぱり」私の言ふ通になさい。蠟燭の火をお消しなさい。すると雨戸を明けても外から見えません。それから何をするにも窓から離れていらつしやい。私を見附けたら早速發砲しますからね。

38

ライナ「男にしがみついて」

それは見附かりますよ、好い月夜ですもの。私助けて上げます。まあ、あなたごうしてそんなに平氣なの。助けてもらひたいでせう。ぢやない。

男

御手敷をかけたくありません。「ライナはじれて男を揺ぶる」ごうして平氣ではありませんよ、併し私をごうしようといふのです。

ライナ

窓を離れて入らつしやいよ、願ひだから。「あやなすようにして部屋の真中へ連れて行く男は言ふ儘になつてゐる、ライナは男を離し、保護者の口吻で」ま、お聞きなさい。この家では安心してゐて宜いのです。あなたが今ゐる家がごういふ家なのか、まだ御存じないのでせう。私はペトコフ家のものです。

男

それは何です。

ライナ「聊かむつきして」

此國で第一の財産家であり一番知られてゐるペトコフ家の者だと申すのです。

男

さう、さう。これは失禮。ペトコフ家。成程。ごうもうつかりしてゐました。



ライナ

今し方までは聞いた事の無い名ではありませんか。どうしてそんな知つた振をなさるの。

男

御免なさい。疲れきつてゐるので頭が働かないのです。急に話が變ると骨です。叱つて下さるな。

ライナ

忘れてゐたわ。あなたは泣き出すのでしたね。〔男は眞面目に頷く。ライナは唇を尖らし、やがて保護者の口吻を續けて〕父はこちらの軍隊ではブルガリヤ人で一番高い權力を持つてゐるのです。父は「傲然」と陸軍少佐です。

男〔大に感じたらしい風をして〕

少佐。まあまあ。それは大變。

ライナ

あなたは此邊の事を御存じないので、バルコニイを這登つていらしたのでせう。普通の宅で窓が二側ある二階建の家はうちばかりなのですが、家の中に上り下りする梯子段があるのです。

男

梯子段。どうも大したものですね。お宅は大變贅澤なお暮ですなあ。

ライナ

圖書室つてものを御存じ。

男

圖書室。本が一杯つまつてゐるのですか。

ライナ

ええ。それが宅たくにありますの。ブルガリヤ中で一箇所です。

男

へえ、本物の圖書室ですか。それは拜見したいものですな。



ライナ「氣取つて」

かういふ事をお話するのは、あなたは今文明人の宅にいらつしやるので、そのセルビヤ服を見るなり直にも殺さうとするやうな無智な田舎者の家にゐるのではないといふ事を知らせたい爲です。私等は毎年オペラの季節にはブカレストへ行きます。ウキンに丸ひと月ゐた事もあります。

男

それは氣が附きましたよ。あなたの御見聞のひろいことは、すぐに察しましたよ。

42

ライナ

エルナニのオペラを御覧なすつて。

男

赤い鷲絨びろうきの服を着た悪魔が出て、兵隊のコオラスのある奴でせう。

ライナ「輕蔑した調子で」

いいえ。

男「くたびれたらしい大きな吐息のでるのを抑へて」

では知りませんよ。

ライナ

私はあの場面を知つていらつしやるだらうと思つたわ。エルナニが丁度今夜のあなたのやうに、敵軍に追はれて仇かたきのカスチリヤの貴族の城に逃げ込むと、貴族はエルナニを敵に引渡す事を承知しないのです。お客は神聖なものだといふので。

43

男「一寸目を覺して、忙しく」

お宅の方はさういふ意氣がおりなのですか。

ライナ「威嚴をもつて」

ええ。母や私にはあなたのいふ『意氣』が分るのです。ですからさつきやうにピストルで威かさずに、落人らしく私どもにお縄りになれば、御自分の家うちと同



じやうに安全でしたものを。

男

本當ですか。

ライナ「堪らないので男に背をむけて」

あなたのやうな分らない人は駄目ね。

男

怒つてはいけません。萬一間違つた時分にはまづい事になりますからね。私の親父は愛相のいい人で、ホテルの六軒も持つてゐますが、それでもなかなか安心は出来ないですよ。お父さんはどうしておいでです。

ライナ

父は目下スリブニツツアへいつて、國の爲に戦つて居ります。御安心なさい。

この手を保證にします。これでいいでせう。「手を指出す」

男「自分の手を眺めて」

一寸待つて下さい。その前に手を洗はなくつちや。

ライナ「感心して」

まの感心しましたねえ。あなたは紳士ですね。

男「まごついて」

え。

ライナ

私が驚いたと思つては違ひますよ。上流のブルガリヤ人は、私等の階級の者は、大抵毎日のやうに手を洗ひます。けれどあなたの嗜のいいのに感心しました。ようござんすよ、手を取つても。「再び手を出す」

男「両手を背中へやつて、ライナの手に接吻し」

有り難う。お嬢さん。やつと安心しました。どうぞこの事をお母さんにお打明けなすつて下さいませんか。此上用があるのでなければ、お部屋に内證でゐない方がいいでせう。



ライナ

私がいつて来る間じつとしていらつしやるなら。

男

大丈夫。「オットマンにかける。ライナは寢臺へ行つて毛皮の外套を着る。男は眼を閉ぢる。ライナはドアまでいく、返返るゝ男がもうねむりかけてゐるので」

ライナ「ドアの側で」

あなたねるんぢやありますまいね。「男は五音の分らぬ事を呟く。ライナは駆け寄つて男を揺り」もしもし。目をお明きなさい。ねちまふんだわ。

男

え。ねちまふ。いいえ。いいえ決して。ただ一寸考へて。大丈夫。ちやんとおきてゐます。

ライナ「厳しく」

私が行つて来る間立つてゐて下さい。「男は不承不承に立上る」歸るまで、よくつて。

男「立ちながらよろけて」

大丈夫、大丈夫。御安心なさい。「ライナは心配さうに男を見る。男は力なく笑ふ。ライナは心残して戸口まで行つて返返るゝ、男はもう欠伸あくびをしてゐる。ライナは出て行く。」

男「ねむくなつてしまつて」

ねむ、ねむ、ねむ、ねむ。「語尾は消えてしまふ。轉びかけるので、目を覺して」ここは一體どこだ。どこだらうな。どこにゐるんだな己は。起きてゐなくちやならん。危険でもないところでも起きちやをられん。いいかな。「一心に」危険、危険、危険、危、  
 「又目をさまして」危険は何だ。何が危険かな。「部屋の中をぼんやり見廻して」何を探してゐるんだ。眠る。危険。分らん。「寢臺に突當つて」ああ、さうだ。解つた。これでいいんだ。寢臺に上らう。寝ちやいかん。危険だから。横になつてもいけない。腰をかけるだけ。「寢臺にかける。嬉しさうな顔付になる」ああ。「心持のよささうな吐息をして長長なる。長靴を穿いたまゝ、最後の努力をして脚を寢臺へ載せる。忽ち寢入つてしまふ」

「カザラインにつづいてライナが端入つて来る」



第九節

ライナ「オットマンを見て」

いつちまつたわ、此處に残して置いたのだけれど。

カザライン

此處に。ぢやおりていつたに違ひない。

ライナ「男を見つけて」

あ。「指す」

カザライン「侮られたやうに思つて」

まあ。「寢臺へ歩き寄る。ライナは其後について行き、母と反對の側に立つ」よく寝てゐるよ。

畜生。

ライナ「心配して」

しつ。

カザライン「男をゆすつて」

もし。「更にひどくゆすつて」もし、もし。「頗る猛烈にゆすぶる」もし。

ライナ「母の腕をおさへて」

およしなさい、お母さん。可哀さうなのよ。くたびれてゐるのだけわ。寝かしておきませうよ。

カザライン「手を離して、ライナを見返つて呆れて」

可哀さうだえ。ライナ。「娘を険しい目で見る。男は寢入つてしまふ」



## 第貳幕

千八百八十六年、三月六日。ペトコフ少佐の庭。麗かな春の朝。庭は生生して小綺麗に見える。柵の向には回教の會堂の塔先が見えて、それで其處に低地があつて、小さい町がある事を示してゐる。その二三マイル向にバルカン連峯が隆起して、風景を圍んでゐる。庭の中からその方に向つて見ると、家の側面は左手になつてゐて庭木戸が附いてゐる。そこから一寸した段段を下りて庭へ來るのである。右手には厩があつて、門が附いてゐる。それが庭に侵入してゐる。柵と家とに沿うて灌木の叢があつて、其に干物が掛けてある。家の側を細い小路が通つてゐて、家の角から先が二段ばかり上つてゐて、そこから曲つて見えなくなつてゐる。庭の真中には小さいテエブルがあり曲木椅子が二脚其傍にあつて、朝飯の支度にトルコ風のコオヒイ沸に、コツプ、パンなどが置い

てある。然しコツプは既に汚してあつて、パンは裂いてある。木の腰掛が右手の扉に寄せて据ゑてある。

ルウカは巻煙草をふかしながら、家とテエブルとの間に立つて、輕蔑の態度を取つて一人の下男に背中を向けてゐる。下男は今この女に訓戒を試みてゐるのである。冷靜な性分の中年男で、低度ではあるが明晰な鋭敏な理解力を持つてゐて、現在の位置が自分に相當してゐると信じてゐる婢僕の満足を持つてゐる。そして妄想などは抱かぬ精確な計算家の落着を持つてゐる。白いブルガリヤの服装をしてゐる。即ち飾のついた縁取のジャケットに、胴巻、巾の廣い半股引、飾のある脚絆。頭は顛頂まで剃り上げて、日本人の高い額の格構をしてゐる。其の名はニコラ。

## 第一節

ニコラ



今の中に氣を附けなさい。行儀を直すんだ。奥様はああいふ人だ。奉公人に輕蔑されてゐようといふ人ではない。氣位が高いのだ。だからお前が馬鹿にしてゐるのを感付いた日には、お前は**お暇**だよ。

ルウカ

馬鹿にするよ、馬鹿にするとも。奥さんなんざ何でもないよ。

ニコラ

家の人と喧嘩をするんなら、とてもおれはお前と一所になれないぜ。己と喧嘩するのと同じ事だ。

ルウカ

お前さんは私よりも奥さんの肩を持つのだね。

ニコラ「落着いて」

おれはいつまでも**此家**の人のお蔭を蒙るつもりなのだ。暇をもらつてソフイヤで店を出した時には、**此家**の得意が元手見たやうなものだ。此家の人達に悪く

いはれてはそれきりだよ。

ルウカ

お前さんは意氣地がないね、あの人達が私の事を悪くいへるなら、いつてもら  
はうよ。

ニコラ「憐むやうに」

もう少し分つてゐるかと思つた。だがお前は若いや、まだまだ若い。

ルウカ

さうさ。若いから猶お前さんがすくのだらう。若くつても**此家**の秘密で、人にしやべられては困る事を知つてゐるのですよ。出来るものなら私と喧嘩して見るが宜い。

ニコラ「憫みながら目下に見て」

お前がそんな事をいふのが聞えたら、あの人達がどうすると思ふい。

ルウカ



どうするものかね。

ニコラ

嘘衝だといふのでお暇ひまが出るよ。さうなつてお前の話なんかを本當にする者はありはしない。誰が又雇つて呉れるい。この家うちの人で二度とお前に口を利くものはないだらうせ。いつまで親父を百姓させて置かにやならん事か。「ルウカは腹立しげに巻烟草の吸殻を投げて踏み踰る」己達のやうな貧乏人が、身分のある人の向を張つて頭を擡げやうとする時には、あの人達が己達にとつてごんなに恐ろしい者だかお前はまだ知らないのだ。「傍へ寄つて聲を低めて」己を見る、拾年じゅうねん此家に奉公してゐる。己が秘密を知らないと思つてゐるのか。奥様の事で、千レワ出しても且那樣に知らせたくない事も知つてゐる。且那の事も己がしやべりさへすれば奥様が半年も戦地へ便をしまいといふ程の事も知つてゐる。ライナの事でもサアチャスとの縁が切れさうな事も知つてゐるのだ。もし己が。

ルウカ「急いで振向いて」

どうして知つてゐるんだらう。私はないのに。

ニコラ「狡猾さうに目を開いて」

お前のいふ秘密とはその事かい。そんな事だらうと思つてゐたよ。まあまあ己の言ふやうに神妙にして居なよ。知つてゐてもゐなくつても、おしやべりなんかしない女だと安心させて、まめに奉公するのだ。それが向の望だし、お前もあの人達のお蔭を蒙るのに一番都合がよくなるといふものだ。

ルウカ「鋭い侮蔑をもつて」

お前さんは奉公人根性だよ。

ニコラ「甘んじて」

さうだ。それが奉公の秘訣だ。「鞭の柄で木戸を強く叩く音が厩の方から聞える」

外からの男の聲

おい。おい。ニコラ。

ルウカ



旦那様だ。戦争からお歸りになつたんだよ。

ニコラ「口早に」

きつとだ。戦争が濟んだのだ。あつちへいつて新しいコツファイを持つておいで。

「厩の方へ走り出る」

ルウカ「コツファイ沸やコツプを盆の上に纏めて家の中に運び込みながら」

奉公人根性なんかにされて堪るものか。

「ペトコフ少佐は厩の方からニコラが後について出て来る。快活な、激し易い、平凡な、武骨な五拾歳ばかりの人で、元來自分の収入はこの地方の社會での地位以外に何の野心もないのであるが、今度の戦争でこの町の重要な人物なるため、任ぜられた少佐の階級を以て大に満足してゐる。この男もセルビヤの侵入でブルガリヤ中に勃興した愛國心に引廻されて戦争してゐたのだが、再び家へ歸る事は慥かに嬉しいのである」

第一二節

ペトコフ「鞭でテエアルを指して」

朝飯を外でやつてゐるのか。え。

ニコラ

へい。左様で。奥様もお嬢様も今し方お端入はしらになつたばかりで。

ペトコフ「腰をかけてパンを取りながら」

奥へいつて己が歸つたと言へ。それからコツファイの新しいのを呉れ。

ニコラ

只今参ります。「家の戸口に行く。ルウカは新しいコツファイミ、清潔なコツプミブランテイの壘うしろを盆ひしに載せて出て来てニコラに會ふ」奥様に申し上げたかい。

ルウカ

え。今いらつしやるの。「ニコラは家に端入る。ルウカはコツファイをテエアルの上に載せる」

第三節



ペトコフ

やあ。セルビアの兵隊がお前を連れて逃げもしなかつたなあ。

ルウカ

はい。

ペトコフ

それはよかつた。コニヤツクを持つて来たか。

ルウカ 「テエアルの上に壘を置き」

此處こゝにございます。

ペトコフ

よろしい。「コニヤツクをコツフイの中に少し注ぐ」

「カザラインは時刻がまだ早いので極ざつとして化粧をして、舊は素敵であつたが今は半分切れかかつた赤い朝着の上へ、アルガリヤ風の前垂をかけ、色ごつたハンケチを黒い豊かな髪に纏ひ、素足にトルコ風のスリツバアを穿いて、家の中から出て来た處は、何と云つても驚く可く典雅で且莊重なものである。ルウ

カは家の中へ端入る」

### 第四節

カザライン

あなた本當にびつくり致しましたわ。「椅子の後からすつまかがんで接吻する」新しいコツフイを持つて参りましたか。

ペトコフ

ああ。ルウカが氣を附けて呉れたよ。戦争はすんだ。條約は三日前にブカレストで調印した。軍隊の複員令も昨日きのふ出た。

カザライン 「飛び上つて眼をばちくりさせて」

戦争が済みましたの。オオストリヤが和睦を強制したのですね。

ペトコフ 「下手したてに出て」

己は相談に與らないのだよ。己がどうにもしやうがないではないか。「カザライ



ンは腰を下して、ペトコフに後向になる」無論條約は名譽になるやうにはしてある。平和を宣言して。

カザライン「憤慨して」

平和。

ペトコフ「宥めながら」

といつても親交條約ではない。いいかね。奴等は其條件を入れやうと爲たのだが、己は撤回を主張した。それ以上己には出来ん。

カザライン

セルビヤを併合して、アレキサンダア公をバルカンの皇帝にする事が出来たのです。私ならさうしたい所です。

ペトコフ

成程己もさう思ふ。然し先づオオストリヤ帝國を征服しなければならんだらう。さうするとずつと長くお前たちと離れてゐる事になるからな。大變なつかしく

思つたよ。

カザライン「和らいで」

まあ。「情をこめて手をさしのばしテエアルを越えて良人の手を握る」

ペトコフ

變りはなかつたかね。

カザライン

ええ、いつもの喉の病。それだけです。

ペトコフ「確信をもつて」

それは毎日襟頸を洗ふからだ。よくいふ事だが。

カザライン

馬鹿おつしやい。

ペトコフ「コツファイも巻烟草のみながら」

餘り當世風に走り過ぎるのは賛成せん。軀を洗ふのは健康に宜い筈はない、不



自然だよ。フイリツポボリスにイギリス人がゐて、それが毎朝おきると冷たい水で軀をぬらして居つた。堪らん。ああ云ふ事は皆イギリスから傳はつて來るのだ。奴等の方の氣候は悪いから、しよつちう軀を拭かんと汚れるのだ。己の親父を見る、生涯湯に端入らなかつた。それだのに九十八まで生きて、ブルガリヤ中一番の健康者だつた。身分柄一週に一回の水浴は何ともいはんが、毎日一回は極端すぎる。

カザライン

あなたは心しんが野蠻しんでいらつしやる。ロシヤの將校方の前でちやんとしていらしつたでせうね。

ペトコフ

充分やつた。成だけ圖書室のある事を知らせるやうにした。

カザライン

しかし圖書室に電鈴のある事はお話なさらなかつたでせう。ひとつ取付けまし

たよ。

ペトコフ

電鈴とは何だい。

カザライン

ボタンを押すと、臺所で鈴が鳴るのです。するとニコラが來ますの。

ペトコフ

なせ呼びつけないのか。

カザライン

文明人は奉公人を呼び附けないものですよ。いらつしやらない間にそれがわかりました。

ペトコフ

私も此間知つた事を話さう。文明人は洗濯物をお客の見える處に干さないんだよ。取除けて「叢の着物を指し」外の處へやつたらよからう。



カザライン

そんな事があるもんですか。上品な人はあんなものに目はつきません。[誰かが厩の庭の門を叩く]

ペトコフ

サアチヤスだ。[呼ぶ]おい、ニコラ。

カザライン

怒鳴るのはおよしなさい。見つともないから。

ペトコフ

なんの。[前より大きな聲で]ニコラ。

ニコラ [家の戸口に顯れて]

へい。

ペトコフ

サラノフ少佐だつたら、すつとこつちへ案内しろ。[サラノフのラに力を入れてサラアノ

フミ發音する

ニコラ

へい。[厩の方へいく]

ペトコフ

ライナが来てあの男を連れて行くまで、お前が相手をしてゐてくれ。あの男は己達が昇進をさせないといつて、大に己を困らせるのだよ、己よりも上にだぞ。どうです。

カザライン

ライナと一所になつたら、是非昇進させなくてはねえ。それにせめて一人位はこの國の人から將官が出したうござんすわ。

ペトコフ

さうだ。さうなつてあの男が、聯隊どころでなく旅團を全滅させてしまふだらうて。とても駄目だよ。平和が永續する見込がつかないうちは、昇進のあてはな



いのだよ。

ニコラ「門の處で取次ぐ」

サアヂヤス・サラノフ少佐。「家へ端入つて、別の椅子を一脚持つて来てテエアルの側に置き、退場する」

「サアヂヤス・サラノフ少佐はライナの寢室にあつた寫眞の本人で、丈のたけ高い中世紀的に端麗な男子である。剛毅な肉體、高氣な精神、それから慥悍な野武士の頭領の血氣に早る概を持つてゐる。然し彼にまつて著しい固有の特徴は、文明人の型である事である。眉は彎曲して眼窩の外側の隅を廻つて、牝羊の角のやうになつてゐる。猜疑深さうな物を熟視する眼を持つてゐる。鼻は戰鬪性を帯びたる高い鼻梁で、大きな鼻の穴には似ず、肉が薄く、尖つて感覺過敏らしい。決斷性を示したその願等。以上はパリのサロンに出品せらる可きもので、怜悧で想像力に富んだ未開人が、バルカン半島に西方文明が漸入した爲めその批判力が鋭敏に活動するやうになつた事を示してゐる。其結果は十九世紀思潮が初めて英國に移入した時と酷似してゐる。即ちバイロン主義である。彼は自分の理想通の生活を爲やうとして他人ばかりか自身までも毎に失敗する事を斷えず苦にしてゐる爲に、その結果人生に對して皮肉な不平を持つてゐる爲に、自分の考を絶對的に正當と信じ、其を重んじない世間を輕薄だと信じてゐる爲に、人人と日常の交

際の際に、彼の鋭敏な觀察に觸れた微細の反理想的の事實に刺戟されて、世間をば嫌悪し嘲笑してゐる爲に、彼は半ば悲壯的、半ば冷笑的な様子で、底の知れぬ不機嫌な氣質に變り、盡きない痛恨の外何もなき怪しき暗黒な過去を暗示するやうになつた。是こそは即ちチャイルド・ハロールドが依て以て當時の英國の老婦人を魅し去つた所のものである。是は明かにライナの理想の勇士に外ならぬ。カザラインも彼の事に就ては娘に劣らぬ熱心を持つてゐて、おまけにその熱心を表白する事も娘程に遠慮はして居らぬ。サアヂヤスが厥の門を端入つて來ると、カザラインは大に感激の情を表はして彼を迎へた。ペトコフは明かに彼の事を大騒しやゝといふ氣はない」

第五節

ペトコフ

やつて來たね、御機嫌よう。

カザライン

まあ、サアヂヤス。「兩手を出す」



お母さん。

サアチヤス「またるこい科しなをして兩手に接吻して」

ペトコフ「そつげなく」

腰をかけて、コツファイをやりたまへ。

サアチヤス

結構です。いりません。「ペトコフがうまさうに飲んでゐるのに悪感を催してテエプルから遠ざかり、家へ通ふ段段の手擦の方へ向いて、わざとらしい威厳をつくる」

カザラサン

本當に立派ですね。戦争で磨いて來なすつたよ。誰でもあなたの事といふと丸で氣違です。目ざましい騎兵の呐喊の事では皆が評判して夢中なのですよ。

サアチヤス「眞面目な嫌味で」

奥さん。あれは私の軍人としての名譽の始であり、終であつたのです。

カザライン

ごうしてね。

サアチヤス

豪まういロシヤの將校が正則に戦争をして失敗してゐるところを、私が變則にやつて勝ちました。それで作戰計畫が狂つて、あの人達の自負心を傷けたのです。二人のロシヤ大佐は科學的戰術の正則を守つてゐて、聯隊を退却させました。少將が二人軍隊の禮式を嚴守した爲討死しました。その大佐は今少將です。そして私は未だにただの少佐です。

カザライン

いつまでもさうではありませんよ。女連はあなたの身方です。今に正當な事にしますから。

サアチヤス

後の祭です。やつと平和になつたので、辭表を提出しました。

ペトコフ「呆れてコツプを落し」



辭表。

カザライン

それは引込めなくてはいいけません。

サアチヤス「腕組して決心を示した語氣で」

私は決して引込めません。

ペトコフ「困つて」

君がそんな事をしやうとは、誰も思ひがけない事だ。

サアチヤス「熱して」

私を知つてゐる人には分つてゐます。しかし私の事はもう結構です。ライナは  
どうしましたか、何處にゐますか。

## 第六節

ライナ「家の隅を廻つて突然に通路の段段の上に立つて」

ライナはここにゐます。「皆が其方を振向くミライナは美しい畫面を成して立つてゐる。薄藍緑の絹のアンダドレスを着て、上に薄いエクリュウ・カンバスの金の縁取のオバドレスを着てゐる。頭には金糸の美しいフリチア帽を被つてゐる。サアチヤスは嬉の叫を發して、衝動的に歩み寄つて出迎る。ライナは手を出す。サアチヤスは中世紀的に跪いて手に接吻する」

ペトコフ「娘自慢で、カザラインに」

美しいぢやないか。いつでももうまい時に飛び出して来るね。

カザライン「恠へかれて」

さうです。それまで立聞してゐるのです、悪い癖ですよ。「サアチヤスはライナが王妃  
でもあるやうに、大層な儀式をして導いて来る。テーブルの側まで来るミライナは首を曲げてサアチヤスの方を向くミ、サアチヤスは頭を下げる。これで二人は離れて、サアチヤスは自分の席に就き、ライナは父の椅子の後に行く」

ライナ「<sup>かが</sup>屈んで父に接吻し」

お父様。お歸り。



ヘトコフ「ライナの頬をたたいて」

いい兒だ。「接吻する。ニコラがサアチヤスの爲の積で持つて来た椅子にライナが行つて腰掛ける」

カザライン

それではあなたはもう兵隊ではないのですね。

サアチヤス

もう兵隊ではありません。奥さん。軍隊の操縦は卑怯者の技術で、自分が強ければ容赦なく攻撃し、弱ければ危きに近寄らない。それが戦闘に成功する秘訣です。敵の不利に附込む可し、決して對等の場合に戦ふ勿れです。ね、少佐。

ヘトコフ

正堂堂の戦たかひは向がさせない。しかし己が思ふに戦争もほかの商賣と同様に一種の商賣かもしれんね。

サアチヤス

全くです。しかし私は商賣人として名譽を得やうといふ野心はありません。それ

ですからあの商賣人の大尉の忠告を容れて、ピイロットで捕虜の交換を約束して、引渡してしまつたのです。

ヘトコフ

ええ。あのスキツツル人の奴か。己はその後あの交換の事を度度考へて見たのだ。あの馬の事では彼奴我我きつを騙したのだよ。

サアチヤス

勿論我我を騙したのです。あいつの親父おやぢはホテルの主人で、貸馬屋をしてゐるので、馬の取引は手心があつたのです。「似え以せ非の憤慨をして」ああ奴は軍人です。つま先まで軍人です。私も聯隊を危険に陥れるやうな馬鹿をする代りに、聯隊の爲に馬でも買つて置いたら、今頃は元帥になつてゐた筈です。

カザライン

スキツツル人。セルビヤの軍隊で何をしてゐた人。

ヘトコフ



無論義勇兵なのだが、職業にぬけめのない奴さ。「笑つて」ああいふ外國人が戦争はかうするものだといつて己達に教へなかつたら、己達は戦争などをする筈ではないのだ。己達は戦争の事は丸で知らないのだからな。セルビヤ人だつて知りません。あいつ等がをらなければ戦争はなかつたのだせ。

ライナ

セルビヤの軍隊にはスキツツルの士官が大勢ゐて。

ヘトコフ

いや。皆オオストリヤ人だ。丁度こつちの將校が皆ロシヤ人なのと同じだ。私が遇つたスキツツル人のその男ひとりぎりだ。もう二度とスキツツル人は信用せん。己達は騙されて、達者な人間五十人を、死にかかつた戦馬二百頭と引換に渡してしまつた。食ふ事も出来ない馬だ。

サアチヤス

ああいふ功勞へた軍人の手にかかつては、二人とも子供です。全く無邪氣な子

供です。

ライナ

どんな風の人。

カザライン

ライナ。何といふ馬鹿な事を聞くのです。

サアチヤス

軍服を着た旅商人たびりきやうといふ風でした。つま先まで町人です。

ヘトコフ「齒をむき出して」

サアチヤス。奴の友達が己達に話した珍談をカザラインに聞かせたまへ。奴がスリブニツツアで負けて逃げた話をさ。おぼえてゐるかね。二人の女にかくま匿つてもらつた事を。

サアチヤス「鋭い皮肉で」

左様。左様。丸で小説です。奴は私が素人流に呐喊をやつたその砲兵隊に働い



てゐたのです。奴はすつかり軍人ですから、こつちの騎兵に追驅られて、他の奴と一所に逃げたのです。敵の目を避ける爲めに、結構な嗜でね、ある愛國心の強いブルガリヤの若い婦人の寢室に隠れたのです。その若い婦人は奴の旅商人式のうまいやり口に惚込んでしまつたのです。そして非常に鄭重に一時間ばかりもてなしたのですが、やがて母親を呼んで來ました。振舞が娘らしくないと思はれてはいけないと思つたのです。ところが老婦人も同様に惚込んでしまつた。それでその逃亡兵に古上着を着せて翌朝逃してやつたのです。それが出征してゐた主人の古上着でなのです。

ライナ「際立つて威嚴を作つて」

あなたは戦争のお蔭で無作法になりましたね。そんな話を私のゐる前でなさる方だと思ひませんでした。「そつけなく傍を向く」

カザライン「同じく立上つて」

本當だ。そんな女があるにしても、私どもは知らずにゐたいものです。

ヘトコフ

ふう。馬鹿馬鹿しい。何がかまふものか。

サアチヤス「恥入つて」

いや、私が悪かつたのです。「ライナに對ひ熱心に卑下して」御免下さい。非常な失禮をしました。勘忍して下さい。「ライナはすまして頭を下げる」それから奥さんも。「カザラインは容子よく會釋して着席する。サアチヤスは慎重な口吻でライナに對ひ」この二三箇月人生の裏面をちよいちよい見るので、皮肉になつたのです。然しその皮肉をここで出すのではなかつたのです。就中あなたの前では。私は。「ここで皆を見返つて長い演説を始めようとする積ださふ風が見えたので、少佐は止めて」

ヘトコフ

馬鹿馬鹿しい、下らない。つまらん事に騒ぎ立てる。軍人の娘は少しはひどい話も平氣で聞けるやうでなくてはいかん。「立上つて」さあ、時間だからもう爲事をしよう。己達は三個聯隊をフィリツポボリスへ送り返すのを、どうして宜い



か決定しなくてはならん。ソフイヤ廻りにすると糧食がないのでな。「家の方へ歩  
く」来たまへ。「サアチヤスはついて行かうとするを、カザラインは立上つて遮る」

カザライン

一寸の間この人を置いておいて下さいませんか。ライナはろくに話もしやしま  
せん。聯隊の事は私でも御相談出来るでせうから。

サアチヤス「反対して」

奥さん、駄目です。あなたでは。

カザライン「冗談らしく引止めて」

あなたはここにいらつしやいよ。急ぐ事はありません。うちに一寸話をする事  
がありますからね。「サアチヤスは直に頷き、戻る」さあ、あなた。「ベトコフの腕をこつて」  
電鈴を見に行きませう。

ベトコフ

うむ。よしよし。「二人は睦しきうに家へ端入る」

第七節

「サアチヤスはライナと二人きりになつて、ライナがまた怒つてゐはせぬかき氣を揉んで顔を見てゐる。  
ライナはにこりさして彼に手を指出す」

サアチヤス「急いでライナに寄り」

もう治つて。

ライナ「男の肩に兩手をかけて男を見上げ、歎美と崇拜を表現して」

あなたは勇士よ。あなたは王様よ。

サアチヤス

あなたは王妃だ。「女の額に接吻する」

ライナ

わたしあなたが羨しいわ。あなたは世界へ出て、戦場へ出て、世界中のどの女  
の夫としても立派な方になつたのですもの。それなのに私は家にじつとしてゐ



て、夢を見てゐて、何の役にも立たず、誰の奥様になる資格もないのよ。

サアチヤス

私の手柄は皆あなたの手柄です。あなたが私を感激させたのですもの。私は昔の武士が、戀人の見てゐる前で試合に出た丁度その心持で戦争をしてゐました。

ライナ

私の方でもあなたの事は少しの間も忘れませんでしたわ。「非常に嚴かに」ねえ。二人はつまり高級な戀愛を知つたのです。あなたの事を思ふと、卑しい行をしたり、さもしい考を起す事は出来ないやうに思ひます。

サアチヤス

あなたは私のためには姫君です、聖者です。「恭しく抱擁する」

ライナ「抱き返して」

私からは殿様ですわ。私からは。

サアチヤス

まあまあ私を崇拜者にして置いて下さい。どんな立派な男でも、處女の純潔な愛情を受けるだけの資格はないものです。

ライナ

わたしはあなたに身を任せます。あなたを愛します。私は失望する事は必ずありません。「ルウカが家の内で何か歌つてゐるのが聞える。兩人急いで離れる」ルウカが出て來ても、もう平氣でお話する事は出来ませんわ。私の胸は一ぱいなのですもの。

「ルウカは盆を持つて家から出て來る。テーブルの處に行き、二人に背をむけてテーブルを拭き始める」帽子を取つて來ますわ。お晝まで外を歩いてゐられるわね。さうしませんか。

サアチヤス

早くなさい。あなたが五分間ゐなくても、五時間位の氣がするのです。「ライナは段段の頂上まで駆け上り、振返つてサアチヤスと顔を見合せ、両手で接吻を送る。サアチヤスは暫く感動して後を見送つてゐたが、徐徐に向返る、さ意氣揚揚とした顔色をしてゐる。この回轉の爲めに彼の眼界は變つて、其一隅にルウカの前垂の端が端入る。彼の視線は突然停つた。彼は女を横目で見ながら、左の



手を腰にあてて肘を張り、口髭をひれつてゐる。ミギ騎兵が威張る時するやうに、踵で地面を踏み鳴らし、テエアルに近寄りルウカと向ひ合つて話したす」

第八節

サアチヤス

ルウカ。高級な戀愛といふものを知つてゐるかい。

ルウカ「驚いて」

いいえ

サアチヤス

兎に角待つといふものは退屈なものだねえ。何か暇つぶしがほしいよ。

ルウカ「何氣なく」

コツファイを召上るんでせう。「コツファイ沸を取らうとしてテエアルの向ひ側へ手をのぼす」

サアチヤス「手を提へて」

有り難うよ。ルウカ。

ルウカ「引離す振をして」

あら、さういふ積ぢやないんですよ。驚いちまふわ。

サアチヤス「テエアルを避けてルウカを引寄せて」

己も自分で驚くよ。スリブニツツアのサアチヤスが、今の己を見たら何といふだらう。高級な戀愛の使徒のサアチヤスが今の己を見たら何といふだらう。己の體から出たり端入つたりしてゐる六人のサアチヤスが二人を見附けたら何といふだらう。「ルウカの手を離し、自分の腕を巧みに女の腰に纏はせ」己の姿を立派と思ふか。

ルウカ

離して下さいよ。叱られますから。「藻掻く、サアチヤスはがっしり提まへてゐる」離して下さいね。

アサチヤス「顔をちつき覗いて」

いいや。



ルウカ

ぢやあ目につかない處にゐませうよ。常識がなくつて、あなたは。

サアチヤス

それは理窟だ。「家から見えない厩の門の内へ連れて行く」

ルウカ「歎願するやうに」

窓から見られたかもしれませんわ。お嬢さんはきつとあなたを見張つていらつしやるのだから。

サアチヤス「ぎくりとして、女を離し」

お氣を付けよ、己は高級の戀愛を忘れてしまひかねない男だからね。といつてその戀愛を輕蔑してはいかんぞ。

ルウカ「眞目に」

どう致しまして、大丈夫です。爲事にかかつてても宜しいでせう。

サアチヤス「再び抱きしめて」

貴様はたまらなく人を迷はせる奴だな。もし己と惚れ合つてゐたら、己を窓から見張るか。

ルウカ

さあ。あなたは一時に六人の違つたお方におんななさるさうですから、見張るのに骨が折れますわね。

サアチヤス「うつむきして」

器量もいいし、氣が利いてゐる。「接吻しようとする」

ルウカ「逃げて」

いけません。キツスはいやです。あなた方は皆同じやうね。あなたはお嬢さんに隠れて私にこんな事をなさるし、お嬢さんはあなたに隠れて同じ様な事をなさるし。

サアチヤス「一步すすつて」

何だつて。



ルウカ

私を本當に思つていらつしやらないのがそれでしれるわ。

サアチヤス 「心易立をやめて冷かに儀式張つて」

もつと何かいふ積なら、紳士といふものは約束してある婦人の身持の事で、召使と議論なんかする者ではないといふ事を承知して置いてもらひたい。

ルウカ

紳士といふものはどういふ事を善いといふのだから、丸で分らないわ。私にキツスしやうとなさる位だから、そんな他人行儀はおやめなすつたのかと思つた。

サアチヤス 「ルウカに背をむけて門から庭の方へ端入り額を叩いて」

畜生、畜生

ルウカ

は。は。は。私は只の小間使ですけれど、六人のあなたのうちの一人が私によく似てゐるのでせう。[サアチヤスには見返もしないでテエナルへいつて爲事にかかる]

サアチヤス 「自分に」

六人の中でこれが本當の己なんだか、難儀な疑問だ。その中の一人は勇士で、一人は道化で、一人は詐偽師で、一人はならず者だらう。[絶句してルウカを見て苦苦しく]「そして今一人はどうせ卑怯者で、持前のやきもちやきだ。[テエナルに近寄つて]ルウカ。

ルウカ

はあ。

サアチヤス

己の競争者は誰だ。

ルウカ

私の口からは申せませんが、何といつても、かんといつても。

サアチヤス

なせ。



ルウカ

なせでも宜うござんす。それに私から聞いたと仰しやるでせう。すればお暇いとまに  
なりますもの。

サアチヤス「保證する爲めに右手を指出して」

いいや、男の名譽にかけて。「言ひかけて手を垂れて、元氣なく嘲笑ふやうに」といつて今  
し方までふざけてゐたやうな悪さをする男なんだが。一體誰だ。

ルウカ

存じません。見た事ありません。お部屋の戸口から聲を聞いたばかりです。

サアチヤス

こん畜生、どうしてそんな事を。

ルウカ「後へ退つて」

いえ。悪い事を申したのではありません。そんな風にお思ひなさらくとも宜  
しいでせう。奥様がその事は御承知なのです。その方が今度見えれば、お嬢様

はきつと結婚なさるのですよ。先方がお厭でも、さうですよ。あなたもお嬢様  
もお互の目の前と實際のお身持とは違ひますね。「サアチヤスは短剣で刺された様にお  
ののく。やがて怖い顔付をして、物凄く女に歩みよつて、両手で女の二の腕をつかんで」

サアチヤス

己のいふ事をよく聞け。

ルウカ「縮み上つて」

そんなに力一杯。怪我しますわよ。

サアチヤス

かまふもんか。貴様は己を立聞の仲間に入れたな。そして貴様は奥さんに裏切  
したな。

ルウカ「軀をもたえて」

後生ですから。

サアチヤス



それでお前が奉公人根性の下等な穢はしい奴だといふ事がわかる。「不潔なものやうに女を振離して、自分の両手を振りたく。そして塀の側のベンチにいつて腰をかけ、頭をそむけて曇つた顔をして考へ込んでゐる」

ルウカ「袖を捲くり上げて、傷附られた腕にさわりながら泣聲で」

あなたは口がひごくくて、おまけに手だしをするのね。だが宜うござんす、私がどんな穢はしい者だかしらないが、あなただつて同じ事だといふ事が分りました。それにお嬢さんと來たら嘘衝で、あの上品振つてゐるのは誤魔化よ。私の方が六倍も増だわ。「痛くて堪らず、頭を振つてゐる。そして、テエアルの上のものを盆に載せてゐる。サアチャスは一二度疑はしげに女を見る。ルウカは道具を盆に載せてしまつて、全體を一所に運ぶつもりで、切を擴げて盆を包む。そして運ばうとしてかがむと、サアチャスは立上る」

サアチャス

ルウカ。「ルウカは手を止めて挑戦的に男を見つめる」紳士は如何なる場合にも婦人を傷附る権利はない。「帽子をさつて、いかに謙遜して」御免下さい。

ルウカ

さういふ御挨拶は貴婦人方がお喜びになります。奉公人には何になりませう。

サアチャス「武士的儀式をしてゐるのに無作法にされたので、急にやめて苦笑をして

見くびつて」

ふむ。傷の代が欲しいのだな。「軍帽を被りポケットから金を出す」

ルウカ「眼に一抔涙をためて、恠へかれて」

いいえ。傷を直して下さいよ。

サアチャス「ルウカの語調で真剣になり」

どう。「ルウカ左の袖を捲り上げる。右手の指で腕をつかむ。そして傷所を見る。そして首を上げてサアチャスを直視する。終に昂然と其腕を突出して接吻させようとする。男は面喰つて女の顔を見、腕を見、又顔を見、もちもちしてゐたが、やがて息張つて、いけないと叫ぶ。そしてすつと離れる。ルウカは腕を垂れる。無言ですまして盆を取上げて家の方へ行く。其時ライナが歸つて來る。前年即ち千八百八十五年にウキンで最も流行した帽子ミジャケットミを着てゐる。ルウカは傲慢に道を譲り家の中へ端入る」



## 第九節

ライナ

私もうよくつてよ。おやごうしたの、「快活に」ルウカとふざけていらしたの。

サアチヤス「あわてて」

どうしてそんな事をするのですか。

ライナ「恥入つて」

御免なさい。常談よ。けふは嬉しくつて為様がないの。「サアチヤスは急いでライナの

傍に行き、後悔の情を表はして手に接吻する。カザラインは家から出て来て段段の上で二人を呼ぶ」

## 第十節

カザライン「二人の所へおりに来て」

お邪魔してお氣の毒だね。うちが三箇聯隊では困つてゐるのだよ。フィリッポ

ポリスへどうして送つていいかわからないのださ。私の工夫なんざ一一反對するのさ。行つて一つ手傳つて下さいよ。圖書室にゐますからね。

ライナ「失望して」

だつて今散歩にいく處なのよ。

サアチヤス

手間はとりません。五分間待つてゐて下さい。「段段を駈けて家の戸口にいく」

ライナ「段段の上まで後をついて行き、男を見上げて恥かしさうに」

私廻つていつて圖書室の窓からよく見える所で待つてゐますわ。お父さんが私のあるのを氣が附くやうにして頂戴よ。五分間より長かつたら聯隊でも何でもかまはない端入つていつてあなたを引張り出すわ。

サアチヤス「笑ひながら」

よろしい。「家へ端入る。ライナは男が見えなくなるまで見送る。それから、氣のぬけた様子で、物思に沈みながら庭の中をあちこち歩く」



第十一節

カザライン

二人ともあのスキツツル人に遇つてすつかり話をきいたとしたらどうするい。  
お父さんが歸つて来て、あの男に貸してやつた古上着の事を真先に聞きなるだ  
らうぢやないか。お前は困つた事をしておくれたつたね。

ライナ「考へ込んで砂利を見つめながら歩く」

畜生。

カザライン

畜生だつて。何が畜生なんだい。

ライナ

向へいつてしやべるなんて。今ここに來たらチョココレエトクリイムを頬張らし  
て物が言へないやうにしてやるから。

カザライン

そんな馬鹿をおいひでないよ。實際の事をおいひ。お前が私を呼びに來る前、  
あの男はどの位の間お前の部屋にゐたのだい。

ライナ「くるりさ向をむいて、反對の側に歩き出して」

忘れてしまつたわ。

カザライン

忘れる筈はないよ。兵隊達が探しに來た後で登つて來たのかい、それとも士官  
が部屋を探してゐる時もうゐたのかい。

ライナ

いいえ。ええ、あの時きつとゐたのだと思ふわ。

カザライン

居たと思ふ。ライナや。一體どうしたら真直にものをいふ積り。サアヂヤスに  
知れたら、もうおしまひですよ。



ライナ「冷かに無遠慮に」

サアヂヤスはお母さんのお氣に入りですもの。私の代りにお母さんが結婚なすつたら宜かつたらうと私思ふわ。可哀がつて、甘やかして、よくお守をして。

カザライン「無論大きな眼をして」

まあ、そんな事。

ライナ「むらむらとして、獨言のやうに」

私は何かあの人におそろしい事をするか言ふかして見たいやうな氣がしてならない。あの人をまごつかせて、氣が遠くなる様な事をしてやるのだ。「カザラインにすれて」チョココレト兵隊の事があの人に分つたつて私はかまはないわ、知つてもらひたい位だわ。「振向いて蓮葉に通路を通つて家の隅の方へ歩む」

カザライン

お父さんに何と申分していいか分らないぢやないか。

ライナ「二段の階段の上から頸だけ後向いて」

お父さん。お父さんなんか何でもなくせに。「隅を曲つて見えなくなる」

カザライン「娘を見送りながら指を揉んで」

お前がせめてこを十も若ければ。「盆を脇の下にぶらつかせて、ルウカ家から出て来る」何だい。

## 第十二節

ルウカ

男の方が只今おいでになりました。セルビヤの士官の方で。

カザライン「怒つて」

セルビヤ人。何だつてセルビヤ人が。「こ抑制して遮面して」お忘れてゐた。もう戦争は濟んだのだね。これからはセルビヤ人だつて毎日のやうに挨拶に來ないとも限らない。ええと、その方が士官ならなせ且那樣に申し上げないのだい。サラノフ少佐も一所に圖書室においでなのに。何だつて私のところへいつて來るんだよ。



ルウカ

でも奥様に會ひたいと仰しやるのです。奥様を御存じないらしいのでございませす。こちらの女の御主人にといつていらつしやるのですから。この小さな名刺をお渡しになりました。「懐から名刺を出し、盆に載せてカザラインに見せる」

カザライン「讀む」

「ブルンチユリイ大尉」 ドイツ人の名だね。

ルウカ

私はスキツツル人だと思ひます。

カザライン「ルウカが飛び退く程飛び上つて」

スキツツル人。ごんな風な人。

ルウカ「おっおつこ」

大きな絨氈の鞆をお持ちです。

カザライン

さあ大變。あの人が上衣を返しに來たんだよ。歸しておしまひ。誰も居りませんとおいひ。處を聞いてお置き、手紙をやるのだから。お待ち、いけない。いけない。待つとくれ。「思案しようとして椅子にごつかり坐る。ルウカ待つてゐる」且那樣とサラノフ少佐とは圖書室でお世話しいのだね。

ルウカ

はい。左様でございます。

カザライン「決然」

お客様をこの處へお通し。「命令的に」よく鄭寧にするのだよ。ぐづぐづしないでよ。これ「氣短かに盆を引たくつて」これはここに置いて。さ、早くあの方をお連れ申して。

ルウカ

はい。「行く」

カザライン



ルウカや。

ルウカ「立止まって」

はい。

カザライン

圖書室のドアはしまつてゐるかい。

ルウカ

大かたしまつて居りますでせう。

・カザライン

しまつてゐなかつたら通りがけにしめておくれ。

ルウカ

はい。「行きかける」

カザライン

お待ち。「ルウカ止る」二つちの道から歸すのですよ。「厩の門を指す」ニコラにあの

方の鞆を持つてあの方の後からおいでとさうおいひ。忘れないで。

ルウカ「驚いて」

あの方の鞆を。

カザライン

さうだよ。成る丈け早くここへ持つて来るのだよ。「死く」早くおし。「ルウカは家の中に駆け込む。カザラインは前垂をはづして叢の後へ放る。盆をこつて鏡の代にし、その結果頭に巻いてゐたハンケチも前垂と同じく放り出す。髪を撫で付けたのミ、着物を引張り直したので體裁がよくなる」何だつて、何だつて男のくせにかう氣が利かないだらう。撰りに撰つてこんな時に來るなんて。「ルウカは家の戸口に現れてブルンチュリイ大尉ミ取次ぐ。そして段段の一番

に」

上の端に立つてアルンチュリイに道を譲り、それから家へ端入る。大尉はライナの室に危険を冒して來た男である。身綺麗にして、髪は梳り、軍服を着こなして、心配なミは丸でなしであるが、慥かにかの男である。ルウカの後姿が見えなくなるや否や、カザラインはずつと進みよつて、促すやうに、又媚びるやう



ブルンチュユリイ大尉。まあよくいらしゃいましたね。しかし即座に歸つて頂かな  
くではなりませんの。「男は眉をあげる」やどが丁度今婿をつれて歸りました。二人  
とも何も知らないのです。知らうものなら後では大變でございます。あなたは  
外國人でいらつしやるから私どもの外國嫌はお分りになりますまい。私どもは  
未だにセルビヤ人を悪んで居ります。平和になりましたために、やどは獅子が  
餌をなくしたやうなのでございます。秘密がすつかり知れやうものなら決して  
許しては置きません、娘の命も危い位です。あなたも武士的の紳士で軍人でお  
あんなさる以上は、やどの眼にかからないうちに、お歸を願ひたいのです。

ブルンチュユリイ「失望したが、しかし自制して」

直にお暇いたませう。お禮を申して拜借した上衣をお返しに上つたばかり  
です。歸りがけに鞆から出してお召使に手渡させて頂けば、其上お邪魔する事  
はないのです。「ご家へ端入らうする」

カザライン「袖をつかまへて」

そつちへお歸りになつては駄目ですよ。「宥めるやうに厩の門の方に連れて行き」これが  
一番の近道です。ごうも恐れ入りました。お役に立つて嬉しうございます。左  
様なら。

ブルンチュユリイ

ですが私の鞆は。

カザライン

お届けします。お所を伺つて置きませう。

ブルンチュユリイ

なるほど。それでは。「名刺入を出しあせつてゐるカザラインを待たせて宿所を記す。その名刺を  
カザラインに渡す途端に、マトコフは帽子を被らずに、馴馴しい様子で、家から飛び出して来る。サアヤ  
ヤスもついて来る」

第十三節



ヘトコフ 「段段を駆け降りながら」  
 やあ、ブルンチユリイ大尉。

カザライン

これは大變。「扉側の腰掛にへたばつてしまふ」

ヘトコフ 「ブルンチユリイと熱心に握手して、其方に氣がこれてゐたのでカザラインの事は氣が附かず」

家の間拔等は己が庭にをると思つてゐたのだな。己は、それ、例の圖書室にゐたのに。「圖書室の事をいふ時は、その自慢を隠す譯にはいかぬ」己は君を窓から見たよ。どうして端入つて來られんのかと思つてゐたのだ。サラノフも居りますよ。おぼえてゐますかな。

サアチヤス 「心持よく挨拶して、非常に美事な態度で手を指出して」

よく來ました。敵國の友人だ。

ヘトコフ

もう敵國ではないよ。「氣つかはしげに」君は友人として訪問せられたのでせう。馬や捕虜の事ではないのでせう。

カザライン

お友達になつてですとも。今ブルンチユリイ大尉にお晝までおいでなさるやうにお勧めしてゐた所です。しかしどうしても歸らなければと仰しやるんです。

サアチヤス 「苦笑して」

それはいけません。あなたに差迫つた用があるのです。騎兵を三個聯隊ブイリツポボリスへ送らなければならんのですが、どうしていいか丸で分りません。

ブルンチユリイ 「急に氣を附けて、實務家的に」

ブイリツポボリスへ。糧食が厄介ですな。

ヘトコフ 「熱心に」

さやう、それなんです。「サアチヤスに」直に大體を見るのだね。

ブルンチユリイ



その始末ならばお指圖申す事が出来さうです。

サアチヤス

忝けない。どうぞこつちへ。「かぶさるやうにブルンチュユリイの肩に手をかけて段段の方へ連れていく。ペトコフついていく。プリンチュユリイが段段に足をかける丁度にライナが家から出て来る」

## 第十四節

ライナ「全く度膽をぬかれて」

まあ、チヨコレエト兵隊。「ブルンチュユリイはぎつくりして立止る。サアチヤスは呆れてライナを見、それからペトコフを顧るに、ペトコフはサアチヤスを見返し、己が妻を見る」

カザライン「充分落着いて」

ライナ。お客様ですよ。セルビヤの方で、今お近附になつたブルンチュユリイ大尉です。「ライナ會釋する。ブルンチュユリイも會釋する」

ライナ

まあ、私馬鹿ねえ。「昔の中央に降りて来てブルンチュユリイミペトコフとの間に立つ」私けさアイスブデンに綺麗なチヨコレエトの裝飾をこしらへましたの。するとあのぼんやりニコラがお皿をその上へ落ことして毀してしまふんですもの。「愛嬌をもつてブルンチュユリイに」あなたの事をチヨコレエト兵隊といつたごはお思ひにならないでせうね。

ブルンチュユリイ「笑ひながら」

全くさうかと思ひましたよ。「妙な眼付でライナをそつと見て」その御説明で安心しました。

ペトコフ「ライナに不審さうに」

いつからお前が料理をするやうになつたんだ。

カザライン

ええ、お留守中です。あれの此頃の道樂なのですよ。

ペトコフ「ぶりぶりして」



そこでニコラが飲み始めたといふのか。今迄氣の附く奴だつたがなあ。己がそれ、例の圖書室にゐるのを承知しながら、ブルンチュリイ大尉を先に庭へ案内したりして。それから臺所へいつてライナのチヨコレエト兵隊を毀したり。あいつ奴きつと。」「ニコラ靴を持つて段段の上に現れる。降りて来て恭しくブルンチュリイの前に靴を置いて、命令を待つ。一同呆れる。ニコラは自分のしてゐる事の爲にはしらないから極めて平氣である。ペトコフはやつと物が言へるやうになつて、怒鳴りつける」

第十五節

ヘトコフ

ニコラ。貴様は氣が違つたか。

ニコラ「驚いて」

へえ。

ヘトコフ

何の爲めにそんなものを持つて來たか。

ニコラ

奥様のお言付いひつけで。ルウカが。

カザライン「遮り」

私の言付だつて。ブルンチュリイ大尉のお荷物をここへ持つて來いなんて、何で私がいふものかね。何を考へてゐるのだよ。

ニコラ「一寸まごついたが靴を持上げてブルンチュリイに向ひ、完全な奉公人根性をもつて」

あなた様、ごうも相濟みません。「カザラインに」手前の勘違でございましたが、どうぞ御勘辨を願ひます。「と低頭して靴を持つて段段の方へ行きかけるミ、ペトコフは恐ろしい勢で」

ヘトコフ

その靴も臺所へもつていつて、お嬢さんのアイヌブデンの上へ叩きつける。



「ニコラは意外なので、思はず鞆を落とす」あつちへいけ、間拔奴

ニコラ「鞆を取上げ家の中に逃げ込み」

へい、へい。

カザライン

ようござんすよ、怒らなくつても。

ペトコフ「ぶつぶついひながら」

いけない奴。己の居らんうちに手におへなくなつた。懲らしてやらう、「客の事に氣がついて」氣にしたまふな。歸るなんてそんな馬鹿な事はやめたまへ。スキツツルへまだ歸る事はないのだらうから、それまで我家に泊りたまへ。

ライナ

さうなさいよ。ブルンチユリイ大尉。

ヘトコフ「カザラインに」

おい、お前に氣がねしてゐられるのだ。おすすめしなさい。泊んなさるよ。

カザライン

無論泊つて下さるお積なら嬉しいのです。「願ふやうに」私の心は充分御承知の筈です。

ブルンチユリイ

奥様の御命令通りです。

サアチヤス「睡ましげに」

それできまつた。

ヘトコフ「喜んで」

きまつたとも。

ライナ

よくつて、泊らなくつちやならないのよ。

ブルンチユリイ「微笑して」

泊らなくちやならないなら、泊らなくちやなりません。「カザライン 絶望の身振をする」



## 第 三 幕

圖書室の内部。晝食後。圖書室らしい所は少ない。書籍の備附といつては、造附の書棚に背が毀れてコツファイで汚れて、破れて手垢のついた紙表紙の古い小説を詰込んだのが只一段と、前に小さい弔棚が一対あつて、其上には繪本が數冊のせてある。その他の壁間には戦利品や狩獵品やで一杯になつてゐる。然し非常に居心地のいい廣間である。列んでゐる三つの大きな窓からは山の全景が見えて、其が丁度今軟な午後の日光を受けて、親しげな風情である。右手の窓の先の室隅には四角な陶器の暖爐が、丸で彩色した陶器の塔のやうに、天井に届く程に高く、暖かい事を請合つてゐるやうである。中央にあるオットマンは飾の附いたクッションを圓く積重ねた臺のやうに見え、窓際の腰掛には据わり心地よく出來たダイヴンが置いてある。小さなトルコ式のテエブルが數基、其

一つには精巧なトルコ式水烟管ホカが載せてある。そして是等に調和した衝立ツツが立ててある。以上で室内の飾立は充分である。ただ一つ周囲とどうしても呼應しない品物がある。それは小さい臺所机で、使ひ古してある爲猶更まづいのが、筆記机にせられてゐるので、其上にはペンが一ぱい端入つてゐる箱と、インキを入れた卵コップと、さんざ使つた吸取紙の切端とが置いてある。

此机は左手の窓に反對に置いてあるので、これの横手にブルンチュリイが据わつて、自分の前に地圖を擴げて、命令書を書いたりしてせつせと爲事をしてゐる。机の正座にはこれも爲事をしてゐる筈のサアチャスが、實はペンの羽根を咬んで、自分の無能に引くらべてブルンチュリイの敏活な確實な事務的な行り口に妬ましいやうな不快を感じてゐる。其爲事は俗なものでそれを賞讃はせぬけれども、彼から見れば奇蹟とも思はれる能力には驚嘆してゐる。少佐は心地よげにオットマンに腰を下して、新聞を読みながら手近の處に水烟管を置いてゐる。カザラインは暖爐に向つて腰を掛け、皆に背を向けて刺繡をしてゐる



ライナは右手の窓側のタイヴンに倚りかかつて、読み飽いた小説本を膝にのせたまま、バルカン山の風景を夢心地で眺めてゐる。  
 ドアは暖爐と同じ側にある。しかし窓からはずつと離れてゐる。電鈴のボタンはドアと暖爐との間にある。

第一節

ペトコフ「新聞から眼を離し爲事の様子を見て」

己には實際どうしても手傳ふ事がないものかね。

フルンチュリイ「書く手を止めず、見上げもせずに」

さうです。澤山ですよ。サラノフと二人でやります。

サアチヤス「苦い顔をして」

さうです。私ごもでやります。この人が考案を立てて、命令書を調製して呉れます。私が署名します。分業なんですよ。「フルンチュリイが一枚の書類を交附する」今

一つですね。有り難う。「書面を自分の前に眞四角に擴げ、それと並行に椅子を直してきて署名する風はいかにも人が意を決して困難な爲事をするやうである」この手はペンよりも劍を使ひ馴れてゐるのでね。

ペトコフ

ブルンチュリイ。實に御好意だ。さうやつて爲事を引受けて下さるのは。それにしても實際己は何も出来んかね。

カザライン「低い聲で戒めて」

あなた邪魔になりますよ。

ペトコフ「驚いて妻の方へ向き」

ええ。おう。成程さうだな。「又新聞を取上げて、直に又下し」お前は戦争に出た事がないのだから知らないが、食事を済ました後でかう据わつて、何もせずに樂をしてゐるのは實に愉快だよ。もう一つのもがあれば己は本當にいいのだがなあ。

カザライン



それは何です。

ペトコフ

いつもの上着さ。これはどうも軀につかない。練兵場に居るやうな心持がする。

カザライン

あなた何を仰しやるのです。あの古い上着は青い押入の中に先の儘に吊してあるではありませんか。

ペトコフ

カザライン。己はあそこを探したんだよ。この眼がどうかしてゐるかね。「カザラインは静に立つて暖爐の傍の電鈴を押す」何の爲めに電鈴を見せびらかすのだ。「カザラインは傲然とペトコフを見、黙つて再び椅子に坐し爲事を始める」女の癖で強情を張り通したら、ライナの古いガウン二枚と、お前の合羽と、己の雨具とで、一枚の上着が出来るだらうと思ふと大間違だよ。青い押入の中にはそれ丈しか今はないのだよ。「ニコラ出て来る」

## 第二節

カザライン「ペトコフの攻撃は何とも思はず」

ニコラ。青い押入へいつてね、旦那様の古い上着を持つて来ておくれ。不斷きていらした縁のついたのだよ。

ニコラ

畏まりました。「出て行く」

ペトコフ

カザライン。

カザライン

はい。何です。

ペトコフ

己はお前にどんなのでもいい、寶石を賭ける。ソフィヤから取寄せて宜い。そ



の代り一週間の生活<sup>くらし</sup>丈を賭けなさい。上衣はきつとあそこにないから。

カザライン

ようござんすとも。

ペトコフ「賭の結果を見越して浮かれて」

さあさあいい機会だよ。誰か賭けんかね。ブルンチュリイ。君と一と六でいかう。

フルンチュリイ「落着いて」

それは私が只とるやうなものです。奥さんの方が確かです。「顔を上げもせず書類を一束サアサヤスに渡す」

サアサヤス「これも浮かれて」

スキツツル萬歳。少佐。私の一番いい軍馬を賭けますから、其に對してあなたはライナにアラビヤ馬をお賭けなさい。上着はきつと青い押入にありますから。

ペトコフ「真面目に」

お前の一番いい軍馬。

カザライン「急いでペトコフを止めて」

馬鹿をしてはいけませんよ。アラビヤ馬は五萬レワもしますよ。

ライナ「突然黙想から醒めて」

さうよ。お母さん、あなたが寶石を取れるのなら、私のアラビヤ馬の事なんかけちけちしくつたつて宜いぢやありませんか。「ニコラ上着を持つて来て、ペトコフの處へ指出す。ペトコフは殆ど自分の眼を信じ兼ねてゐる」

第三節

カザライン

これはどこにあつたえ。

ニコラ

青い押入にかかつて居りました。



ペトコフ

ふむ。これはまゐつたな。

カザライン「抑へて」

あなた。どうです。

ヘトコフ

確かにあそこにはなかつた筈だ。やはり歳をとつたのだな。いよいよ己も老碌したよ。「ニコラに」おい、着かへさせてくれ。君、失敬。「着替る。ニコラが小姓の役をする」いいかい、サアヂヤス。己はお前の賭は乗なかつたぞ。アラビヤ馬はお前がライナに買つてやるがいい。お前があれに期望を起させたのだからな。「ミライナの方を向く。ライナは又ぞろ景色に見蕩れてゐる。娘可哀さと娘自慢さが少し計込み上げて来て、皆に娘を指しながら」れいの空想に耽つとる。

サアヂヤス

決してライナに損をさせるやうな事はしません。

ペトコフ

あれもその方が嬉しからう。己だとさう手軽に済まされないので。【着替すむニコラは用済の上衣を持つて出て行く】ああ、やつといい心持になつた。【腰をかけ、新聞を取つて、樂になつたやうな聲を出す】

フルンチユリイ「サアヂヤスに書附を渡しながら」

これで終ひです。

ペトコフ「躍上つて」

何だもう済んだのか。

フルンチユリイ

済みました。【ペトコフはサアヂヤスの側に行き、物珍らしさうにサアヂヤスの左肩越しに署名する所を見、子供らしい羨望を持つて】

ペトコフ

己が署名するものはないのかね。



フルンチユリイ

それには及びません。この人のでいいのです。

ペトコフ

さあ、これで一日の急らい爲事を爲終せたといふものだ。「机から離れて」外にする事でもあるのかね。

フルンチユリイ

お二人で是を持つて行く使の者に御命令になつた方が宜いのです。「サアチヤスに」直に立たせて下さい。引渡の時刻は命令書の上に書附て置きましたから、其を奴等に見せて下さい。もし途中に引かつつて、飲んだりしやべつたり、そして五分間でも遅れると、背中の皮を引むくといつて下さい。

サアチヤス「憤然と立上つて」

さういひませう。もしひどくいはれたからつて、反抗するだけの奴がゐたら、兵役を解いて、恩給をやりますわ。「大股で出て行く。彼の博愛心はひどく激してゐる」

フルンチユリイ「ペトコフに打明けて」

あの通り少佐がいひ渡しますかごうか、見て来て下さいませんか。

ペトコフ「氣軽く」

よし来た。よし来た。見て来よう。「重々しく戸口まで行つたが、鬨口でためらつて」處でカザラインお前も来たらごうだい。奴等は己よりもお前を恐れてゐるからな。

カザライン「刺繍を下に置いて」

その方がようござんすとも。あなたはがあがあいふだけですもの。「カザライン出て行く。ペトコフはドアを明けてゐて、カザラインに續いて出る」

## 第四節

フルンチユリイ

何といふ國だ。櫻の木で大砲を作つたり、軍紀を聞かせるのに細君を頼んだり。

「書類を疊んで上書し始める。ライナはダイロンから立ち上つて、両手を後で組んで歩き出しながら、か



らかふやうにアルンチユリイを見る」

ライナ

いづぞやお目に掛つた時よりは、ずつと綺麗になつたわね。「アルンチユリイ驚いて上を向く」どうにかなすつたの。

フルンチユリイ

みがきました。髪を掻きました。よくねました。そして朝飯をよく喰ひました。まづそんなものです。

ライナ

あの朝は無事に歸れて。

フルンチユリイ

はあ、お蔭で。

ライナ

サアヂヤスの呐喊に遇つて逃げ出したのを叱られて。

フルンチユリイ

いいえ、皆嬉んでゐました。自分等も皆逃げたのですもの。

ライナ「机の方に行き差向ひに机にもたれて」

私の事や、部屋であつた事なんか、皆に宜い話の種になりましたらう。

フルンチユリイ

大した事です。しかし私は或る特別の友人一人にしか話しませんでした。

ライナ

あなたが絶待に信頼し得る性質の人ですが。

フルンチユリイ

はあ。絶待に。

ライナ

ふむ。あなたが捕虜の交換をなすつた日に、その人が父とサアヂヤスとにすつかり話してしまひましたの。「振向いて平氣で室を横切る」



フルンチユリイ「氣にかけたが半信半疑で」

いいやそんな事はないんでせう。ええ。

ライナ「振返つて、俄かに真面目になつて」

あるんですよ。けれどもあなたが隠れたのが、この内だうちといふ事は知りませんの。サアヂャスがそれを知らうものなら、決闘を申込んであなたを殺しますよ。

フルンチユリイ

大變だ。ではいつてはいけませんよ。

ライナ「彼の輕挑を矯むるさういふ風に」

私としてあの人を欺くといふ事が出来ると思つてゐるの。私ごサアヂャスとの間は立派にしてゐたいのです。卑劣な事や、卑怯な事や、虚偽な事なんかは無しにしてゐたいのです。二人の關係は私の一生の本當に美しい高尚な一面であるのです。そこは呑み込んでゐておもらひ申したいのです。

フルンチユリイ「不審げに」

と仰しやる意味は、あの人にアイヌブデンといふのは實は何だといふ事を知らせたくないといふ事なんでせう。

ライナ「閉口して」

そんなに輕輕しくいふものではありませんよ。あれは嘘よ。それは分つてゐるわ。けれども其はあなたを助ける爲なのです。さもなければあなたは殺される處でしたわ。私が嘘を衝くのはこれが二度目なのよ。「フルンチユリイは急に立上り、疑はしげに、少しく嚴格にライナを見つめる」最初の嘘をおぼえてゐて。

フルンチユリイ

わたしが。いいえ。その時わたしがゐたんですか。

ライナ

さうよ。そして私は探しに來た士官にあなたが居ないつていつたわ。

フルンチユリイ

さうさう。おぼえてゐなければならぬ事でしたな。



ライナ「大にカづいて」

あなたの方が先に忘れてしまふのはもつともですわ。あなたは少しも迷惑はしなかつたけれど、私はお蔭で嘘衝になつてしまつたんです。「オットマンの上に据わり手を膝の上に組合せて、じつと自分の前を見つめる、フルンチュリイは大に動かされて、辨解して宥めやうといふ風でオットマンに近づき、ライナの側に据わる」

フルンチュリイ

お嬢さん。それを苦にする事はありませんよ。ようござんすか、私は兵隊です。兵隊は餘り度度出くわす爲めに。狎れつこになつてゐる事が二つあります。一つは人が嘘を衝くのを聞くこと。「ライナぎよつみする」今一つは色色な人に、色色な手段で救はれる事です。

ライナ「憤慨して抗辨するやうに立上つて」

それで兵隊は信用もなく恩義も感じない動物になるのですね。

フルンチュリイ「顔を曇めて」

感謝されるのが好きですか。私は嫌です。憐みと愛とが親類でも、感謝と愛とは親類ではありません。

ライナ

感謝が。「向き直つて」感謝する事を知らない人は、高尚な情操を少しも知らない人です。動物だつて恩を知つてゐます。あなたが私をどう思つていらつしやるか、これですつかり分りました。あなたは私が嘘を衝いても少しも驚きませんでしたね。きつと私が毎日つづけさまに嘘を衝いてゐるのだらう位に思つていらしたのです。男は大概女をそんな風に思つてゐます。「誇大な身振で室内を歩く」

フルンチュリイ「女の言葉を信じないで」

理窟のないものはありません。あなたは生涯に二度しか嘘を衝かないと仰しや。それではあまり少な過ぎるではありませんか。私は本當に正直者なのです、それでも半日中嘘を衝かすにはゐられませんよ。

ライナ「傲然と睨み」



それでは私を侮蔑する事になります。

フルンチュユリイ

ごうも爲方がありません。あなたがさうした御上品な態度で、切口上で仰しやつてゐる處は、私大に尊敬します。しかし仰しやる事は一言でも信用する事は出来ないと思ひます。

ライナ「おほぎやうに」

ブルンチュユリイ大尉。

フルンチュユリイ「平氣で」

はあ。

ライナ「ブルンチュユリイに近づき、今聞いた言葉は信じ兼ねるさういふ風で」

今仰しやつたことは本當にさう思つておいでなのですか。今何を仰しやつたか御承知ですか。

フルンチュユリイ

知つてゐますとも。

ライナ「息をきつて」

私が、私が。「ライナ・ペトコフが嘘をよく衝つてさういふ積りで、呆れたやうに自分を指す。ブルンチュユリイは平氣で顔を見返す。ライナはいきなり彼の側へ腰をかけ、今までの意氣いけだか高な様子を一變して碎けた調子で」さうしてさう思つて。

フルンチュユリイ「すかさず」

直覺ですよ。直覺と經驗と。

ライナ「驚歎して」

私の言葉を本當にしなかつたのは、今迄にあなたばかりよ。

フルンチュユリイ

といふのはあなたを本當に眞面目に見ぬいたのが私ばかりだといふ事でせう。

ライナ

さあ、大方さういふ事になるのでせう。「氣持よささうに、全く打解けて」こんな風に



いはれるのは本當にめづらしいわ。私といつたらいつでもああいふ風に、御上品な態度で切口上で通して來たのでせう。子供の時分から乳母にもさういふ風だつたの。乳母はその切口上の通りに信じてゐたのよ。親の前でもさうするでせう。二人ともさう信じてゐたのよ。サアヂヤスの前でもしたのです。あの人にもさう思つてゐるの。

フルンチユリイ

さうでせう。あの人も少少その流儀でせう。

ライナ「びっくりして」

さう思つて。

フルンチユリイ

私よりもあなたの方が能く知つてゐるでせう。

ライナ

まあ、本當にさうかしら。さうだとすると。「しをれて」まあいいわ。かまはない。

あなたに私といふものが分つて見ると、あなた私をさげすむだらうと思ふわ。

フルンチユリイ「立上つて、親切に」

いいえ。いいえ。どうしてどうして、それがあなたの若いところ、可哀い處です。私も乳母や御兩親やサアヂヤスのやうな人と同じ事です。私はあなたに目がくらんでゐる崇拜者です。

ライナ「喜んで」

本當。

フルンチユリイ「ドイツ風に手を以て器用に胸を打つて」

Hand aufs Herz! 本當です。

ライナ「頗る喜んで」

けれども私が寫眞を上げたのを何と思つて。

フルンチユリイ「驚いて」

寫眞。あなたわたしに寫眞を下さりはしません。



ライナ「すぐに」

手に端入らなかつたこと。

フルンチユリイ

ええ。「新たに興味を感じて傍に据わり稽や得意で」いつ私に送りました。

ライナ「怒って」

送つたのではありませんよ。「首を外向けて不快さうに」あの上着のかくしに入れてあつたのです。

フルンチユリイ「唇をつぼめ、眼を圓くして」

ほほう、まるで知らなかつた。その儘あるでせう。

ライナ「飛上つて」

その儘。お父さんが手を入れれば直に見つけるわ。どうしてそんな頓間をしたのでせう。

フルンチユリイ「立上つて」

何でもありません。たかが寫真ではありませんか。誰に贈つたのだから分るもんですか。お父様が御自分でお入れなすつたのだとおいひなさい。

ライナ「ぢれつたさうに」

ええ。それが宜いでせうよ。それが宜いでせうよ。まあ、どうしたらよからう。

フルンチユリイ

ははあ成程。何か書いてあるのですね。それは無鐵砲でしたよ。

ライナ「困つて泣かぬばかりに」

あなたのやうな人にあんな事をして。それをあなたは何とも思はないで、笑つてばかりゐるといふ人なんだ。ほかの人は誰もさわらないでしょうね。

フルンチユリイ

大丈夫とはいへませんね。始終あれを持歩く事は出来なかつたんです。戦鬪に従事してゐて荷物は澤山持てませんからね。

ライナ



で、あれをどうしたんです。

ブルンチユリイ

パイロットに行き着いた時分にどこか安全な所へ置かうと思つて、鐵道の荷物預所とも思つたのですが、近頃の戦争ではあそこなどは真先に物がなくなる所ですからね。それで質にいれました。

ライナ

質に入れた。

ブルンチユリイ

人間の悪い事は知つてゐます。しかしそれが一番安全な策なんです。おとつひ請出して來ましたよ。質屋がかくしの中のをだしたか、そいつは分りませんな。

ライナ「大おこりで怒鳴りつける」

あなたはさもししい町人根性ですね。紳士の夢にも思ひ附かない事を考へてゐる

のですね。

ブルンチユリイ「一向平氣で」

それがスキツツルの國民性です。

ライナ

あなたのやうな人には會はなければよかつた。「さ悶えて窓際に据わり怒つてゐる。ルウカが盆の上に手紙と電報と一重載せて端入つて來て、傍若無人な歩振で室を横切つて机の所へ來る左の袖は留針で肩まで捲り上げてあるので、むき出しの腕が見え、傷の上には金減金の腕輪をはめてゐる」

## 第五節

ルウカ「ブルンチユリイに」

あなたのところに。「盆の上のものを無雜作に机の上にあけて」使が待つてゐますよ。「ルウカはセルピヤ人には、手紙を持つて來てやらなければならない時にしても、鄭重な挨拶はしまい決心してゐる」



フルンチユリイ「ライナに」

一寸御免なさい。この前の郵便が三週間ばかり前に来たきりです。これはその後たまつたのです。電報が四通。一週間も遅れてゐる。「一つを開く」おほう。悪いしらせだ。

ライナ「立ち止つて少し進んで氣の毒さうに」

悪いしらせですつて。

フルンチユリイ

親父おやぢが死んだのです。「唇を結んで電報を見つめて、頭の中でこの思ひ掛けない事變について思案してゐる」

ライナ

まあ、お氣の毒ねえ。

フルンチユリイ

ええ。一時間の中に國に立たなければならぬでせう。親父はホテルを幾軒も

残して死んだので、それを面倒見なければならぬのです。「細長い藍色の封筒の厚い手紙を手にさつて」このごえらい手紙は内の代言人から寄越したのです。「中身を抽出して一通目をまほして」やれやれ。七十。二百。「段段に驚き方が強くなつて」四百。四千。九千六百。これをみんなまあごうしたもんだらう。

ライナ「おつおつ」

ホテルが九千軒なの。

フルンチユリイ

ホテルが。馬鹿な。これがもしあなたにわかれば。ほう、馬鹿馬鹿しい。失禮。私は伴の者に出發の事を指圖しなければなりません。「書類を手に持つて急いで部屋を出る」

第六節

ルウカ「嘲つて」



あのスキツツル人には情がないんですね。セルビヤ人の身方をしてゐる癖に、お父さんが死んだつても愁歎らしい事もいひませんのね。

ライナ「邪慳に」

愁歎だつて。幾年も幾年も人殺をするより外にする事のなかつた人だもの。何を思ふものかね。どの軍人だつてみんなさうだよ。「戸口へ行く。涙の出るのを抑へるのに困つて」

ルウカ

サラノフ少佐もやつぱり戦争をしていらしたけれど、あの方は情があまりですわ。「ライナは戸の處で傲然ミルウカを見、出て行く」あはあ。あなたの兵隊さんはあなたに氣がないだらうと思つてゐましたよ。「ライナの後から出やうとするに、ニコラが暖爐の薪を持つて端入つて来る」

## 第七節

ニコラ「にやにや笑つて、色氣をもつて」

一寸でもお前と二人きりになりたいと思つてね、この晝過は丸でそれに氣を取られてしまつたよ。「ルウカの腕に目をつけて顔色をかへて」その袖の捲り方はごこの流はな行りだい。

ルウカ「傲然ミ」

私の流はな行りだよ。

ニコラ

なるほど。奥さんが見つけると文句をいふせ。「薪をオットマンの上へ投出して薪の側に氣持よきさうにかける」

ルウカ

成程さういふ別でお前さんが自身で私にやかましい事をいふのかい。

ニコラ

これさ、さう己に食つてかかんなさんなよ。いい事を聞かせてやらうといふの



だ。「數枚の證券を取出す、ルウカはそれを見ようとして眼をきよろつかせて近寄る」そら、二十レ  
 ワの手形だ。サアヂヤスが見得に寄越したんだ。馬鹿と金とは縁がない奴さ。  
 別に十レワあるよ。これはあのスキツル人がくれたのだ。奥さんとライナが  
 奴の事を嘘衝いてゐたのがばれかけたのを、己がうまくばつを合せてやつた禮  
 だ。奴は馬鹿ぢやないよ。お前に聞かせたかつたせ、カザラインの婆さんが下  
 の間で、恐ろしく鄭重に少佐が氣短かに怒鳴つたのを氣にかけてくれるなつて  
 ね。皆の前で己を馬鹿呼はりして、嘘衝にして置いても、己が忠義な者だとい  
 ふ事は能く知つてゐるからな。二十レワは己達の貯金へ廻して、あとの十レワ  
 は、もしお前が己に人間並に口を利いてくれるならお前がつかつても構はない  
 よ。奉公人であるのも時時は飽飽あきあきするからな。

ルウカ「邪慳に」

さうさ。三十レワでお前さんの男を賣つて、十レワで私を買ふんだね。そのお  
 金はしまつてお置きよ。お前さんは奉公人に生れついてゐるんだ。私は違ひま

すよ。それだからお前さんが店を開いたつて、ひとりの人に使はれる代りに、  
 皆に使はれる事になるのだよ。

ニコラ「薪を取上げ暖爐の方に行きながら」

まあ、見て居ろよ。今に晩だけでも樂をしまさあ。そして己はうぬが内では檀  
 那になるよ。きつとだよ。「薪を投出して暖爐の前に跪く」

ルウカ

私の内では決して檀那樣にはしないよ。「サアヂヤスの掛けてゐた處に傲然と掛ける」

ニコラ「跪いたまま振返つて、女の手剛い侮蔑に恐れて、しほれてしやがみながら」

お前大へんに望がえらくなつてしまつたな。しかし忘れなさんな。お前に運が  
 向いて來たとすると、お前を一人前にしてやつたのは己なんだせ。

ルウカ

お前さんが。

ニコラ「自説を立てて」



さうよ。己よ。頭へ二ポンドも黒い入毛を入れたり、唇や頬べたを赤く塗り立てたりして、ブルガリヤの娘子のやうにしてゐたのをよさせたのは誰だい。己様だぜ。爪を切つたり、手を洗つたり、身の廻りを小ざつぱりしたりして、ロシヤの女のやうに上品にする事は誰が教へたんだい。己なんだぜ。お前聞いているかい。己だぜ。「ルウカは反對するやうに首を振る。ニコラは氣持を悪くして立上つて、すつと冷静に」かう思つた事もあつたよ。ライナが居なくつてお前がも少し利巧で、サアヂヤスがも少し馬鹿だと、己のかみさんに金を費はせる所ではなく、お前が己の大得意の一人になつたかも知れないぞ。

## ルウカ

お前さんは私の亭主になるよりか、私の奉公人になりたいたんだらう。私を儲かる方に使はうといふのだらう。お前さんの根性は分り切つてらあね。

## ニコラ「語勢を強める爲めにすつと近接して」

己の根性などはどうでもいいや。ともかく己のいふ事を聞きなよ。奥様にな

らうといふには、今のお前の己への爲向けでは、差向ひの時なら兎も角、あれではとても駄目だよ。つくけんごんで、おまけにしやあしやあしすぎてる。しやあしやあしてゐるのは心安立だらうが、あれでは己との仲が分つてしまふ。そして己の前で大風なものいけないし、息張るのもいけないよ。お前は丸で田舎娘だぜ。お前は己が馬丁を扱ふやうに奉公人を扱ふのが宜いのだと思つてゐるがそこが物を知らない處なんだよ。それから直に誰にでも返答をするのがいけない。何事もいひ附けられたからやるといふ風でなく、自分の好みでさうすることいふ風に働きなさいよ。奥様でやつて行くのも、奉公人でやつて行くのも同じ事だ。自分の身分を知る事だよ。それが秘傳なんだ。お前が出世した時になつて、己は大丈夫自分の身分を忘れやしないよ。それを能く考へて見な。好い兒だから。己はお前の身方になつてゐるんだ。奉公人はお互に身方だよ。

## ルラカ「じれつたさうに立上り」

へえ、私は私のするやうにするんだよ。お前さんがいやに堅苦しい御託を並べ



るので、大抵元氣がなくなつちやつた。早く薪を火の中へおいれな。お前さんに出来る事はそれ位なもんだよ。」「ニコラが返答せぬ中にサアヂヤスが歸つて来る。ルウカを見て、一寸立ちまつて暖爐の前に行く」

第八節

サアヂヤス「ニコラに」

お前の邪魔になりはしないか。

ニコラ「年寄のやうな柔かい調子で」

滅相な。恐れ入りました。只今丁度この馬鹿娘に小言をいつて居りました所で、折さへあれば図書室へ来て御本を読む癖なのでございます。これが一番この兒の躰になりませんので、へい。上を見る癖が附きまするでな。」「ルウカに」机を綺麗にしなさいよ、少佐さんが御入用だ。」「ニコラは落着いて出て行く。ルウカはサアヂヤスの方を見もしないで机の上の書類を方附ける。サアヂヤスはゆるゆるとルウカの方に行きルウカの袖の處

置法を研究的に見てゐる」

第九節

サアヂヤス

ごんな風だ。痕が附いてゐるか。」「腕輪を押上げて自分が掴んで出来た傷を見る。ルウカはサアヂヤスの顔を見ずにじつと立つてゐる。氣があるのだが、油断はせずにある」やあ。まだ痛いかい。

ルウカ

ええ。

サアヂヤス

己が直してやらうか。

ルウカ「すぐに高慢げに身を引いて、相變らずサアヂヤスの顔は見ずに」

今はあなたには直りません。



サアチヤス「主人然さ」

全くか。「抱かうとする」

ルウカ

御常談なすつちやいけませんよ。將校方は奉公人どぶざけるものではありませんよ。

サアチヤス「人指指で強く女の腕を突きながら」

これは常談ではなかつたね。

ルウカ

さうですとも。「初めてサアチヤスの顔を見て」悪いと思つて。

サアチヤス「腕を組んで、言葉を區切つて」

己は決して悪いと思はん。

ルウカ「考へ込んで」

男が本當に女と違つてその位毅きつくてゐてくれればいいけれどねえ。あなたはた

しかに毅い人なのかしらん。

サアチヤス「單純に、碎けて」

うむ。毅いとも。最初の一發では女のやうに胸がごきついたよ。しかし呐喊となつて自分ながら毅い事が分つたよ。己でもこれだけは確だ。

ルウカ

呐喊なんかの時に、私等のやうな貧乏人の子は、あなた方お金持とくらべて勇氣がないやうに思つて。

サアチヤス「皮肉に」

そんな事はないよ。誰も彼も勇士のやうに斬る怒鳴るわめく。へん、あば廻れつて人を殺す勇氣はお安い勇氣なんだよ。ブルガリヤ全民、それから後押のロシヤ國民の持つてゐる丈の勇氣は、己の飼つてゐる英國産の雜種犬にもあるさ。それでも犬は馬丁には打たれ通しだ。兵卒もそれなんだ。敵の喉笛を切る事は出來ても、士官はおつかないてね。怒鳴られて、撲られても耐へてゐて、外の



奴が子供のやうに折檻されてゐても傍で見えてゐるよ。なあに命令なれば折檻の手傳もしやうといふのさ。處で士官は。「二寸皮肉な笑ひ方をして」己も士官の一人だが。「熱して来て」士官のなかで自分の意志、自分の良心に反對する者は、地上の權力であらうが、天上の權力であらうが、敢て逆つて死ぬまで戦はうといふ人間があるのならお目にかからう。さういふ人間こそ本當の毅い人なんだ。

ルウカ

口でいふのはわけないわね。男といふものは私には何だかいつまでたつても大きくならないものの様に思はれすわ。みんな小學校の生徒のやうな考を持つてゐるのね。あなたは本當の勇氣を御存じないのよ。

サアチヤス「反語的に」

成程ね。御教授が願ひたいね。

ルウカ

私を御覽なさい。どれ丈自分の思ふやうになるもんでせう。私はあなたの部屋

を方付けなければならぬ。掃いたり拭いたり、持つて來たり、持つて行つたり。用をしてもらふあなたは品格を下げないのならば、私だつても品格を下げるはしないわ。けれども。「情を制して」もし私が世界で一番えらいロシアの女王だつた時には、その時にあなたは私が勇氣が出せないと仰しやるけれども、きつと出して見せるわ。きつと出して見せるわ。

サアチヤス

ごういふ事をなされますね、一番えらい女帝陛下。

ルウカ

私のすいた男と結婚します。ヨオロッパの女帝は一人としてその勇氣はありません。もし私があなたをすいてゐれば、今私があなたよりも身分が低いやうにあなたが私より身分が低かつたとしても、私はかまはず低い者と一緒になります。あなたが私をすいていらしたとして、あなたにその勇氣がありますか。ないのよ。私をすきになりかけてゐても、それを本物にしようとはなさらない



でせう。爲えないのです。世間の人があなただの事を何とかかかとかいふもんで、お金持の娘さんと結婚したくなるのでせう。

サアチヤス「すっかりあつて」

嘘をいへ。誓つてそんな事はない。もし己がお前を愛してゐたら、そしてロシヤ皇帝であつたとしたら、己はお前を引上げて己の玉座の隣へ据ゑるよ。ところが己は知つての通りお前とは天と地と程に違ふ女を愛してゐる。それでお前は其女がやけるのだ。

ルウカ

やくわけがありませんわ。お嬢さんは決してあなたと結婚なさらないのですもの。私がお話した人が歸つて來ましたよ。あのスキツツル人と結婚なさるでせう。

サアチヤス「飛びさがつて」

スキツツル人。

ルウカ

あなたより十倍もましな人。さうなるとあなたは私の處へ來るでせう。そこで私がお断です。あなたでは不足です。「ドアの方を向く」

サアチヤス「後から飛びかかつて腕を力一杯に抱へて」

スキツツル人を殺してやる。さうして置いて貴様を思ふやうにしてやる。

ルウカ「抱かつられたま、」

スキツツル人があなたを殺しますよ。あの人は戀でもあなたを敗かしました。たたかつたつて勝つでせう。

サアチヤス「苦惱して」

お嬢さんがそんな事をすると思へるか。あの人の一番下等な考でも、お前の一番上等な考よりも高尚なんだ。その女が己の陰で他の男とふざけるなんて事があるもんか。

ルウカ

それではあのスキツツル人が、私がかうしてあなたに抱かれてゐたとお嬢さん



に話したとしたり、お嬢さんが信じてしまふと思つて。

サアチヤス「絶望してルウカを離す」

畜生。ええ畜生。嘲弄だ、ごこへいつても嘲弄される。己の考へてゐる事は、萬事己のする事で嘲弄される。「狂氣の如く胸を叩いて」卑怯者。嘘衝。馬鹿。男らしく死んでしまはうか。それとも生きてゐて自分を嘲るまねをしようか。「ルウカは再び出て行かうとする」ルウカ。「戸口で立止る」いいか、貴様は己のものだぞ。

ルウカ「靜かに」

と仰しやるのはごういふおつもり。私を馬鹿になさるの。

サアチヤス「押しつけに」

かういふ別だ。お前は己に惚れてゐる。で一度ここで己がお前を抱きしめたからには、ごういふ何處かで又かうするぞといふのだ。これで貴様を馬鹿にする事になるかごうか己は知らん。又ごうでもいい。お前のいいやうにとるがいい。しかし。「激して」卑怯者やいたづら者には成りたくない。己がお前を特に可哀がる

からは、お前をもらふ。ブルガリヤ中を相手にでもする。この手が今一度お前の軀にさわる時はお前は己の花嫁だぞ。

ルウカ

そのお約束が守れますかごうですか。拜見してゐますよ。だけれどしつかりなさい。私は長くは待ちませんよ。

サアチヤス「再び腕組をしてじつと部屋の中央に立つた儘」

よし。見てゐる。さうして己の御意を待つてゐる。「アルンチユリイは、忙しきうに、書類をまた手に持った儘端入て来る。ルウカが出て行くので戸は明けた儘にして置く。通りすがりにルウカをちらと見て、机に近づく。サアチヤスは決心をした態度を變へないで、アルンチユリイを見成つてゐる。ルウカは戸を明けたままにして置いて出て行く」

第十節

アルンチユリイ「ぼんやりして、前の如く机に据わり、書類を其上に置き」



一寸目立つ綺麗な兒だね。

サアチヤス「動かすに嚴かに」

ブルンチユリイ大尉。

ブルンチユリイ

え。

サアチヤス

君は僕を騙した。君は僕の競争者だ。僕は競争者を黙つては居られない。六時に僕はクリツスウラ街道の練兵場に行く。獨りで馬に乗つて、劍をもつて。分りましたかい。

ブルンチユリイ「見詰めてゐたが平氣で腰掛けたまふ」

ふむ。それは有り難い。騎兵の申込だね。私は砲兵隊にゐる者だ。そして私に武器を撰ぶ権利がある。そんならやるとすると機關砲を持つていくがね。今度は彈を間違るやうな事はしないだらうよ。

注意したまへ。ブルガリヤではかういふ種類の申込を常談にしてしまふ事は許さん習慣だから。

ブルンチユリイ「熱して」

へへえ。私にブルガリヤの話はおよしなさい。決闘はごんなものだから、あなたは知らないのだ。あなたの好きなやうにするさ。劍を持つておいでなさい。お相手にならう。

サアチヤス「相手もやはり勇氣のある人だといふ事が分つて大に喜んで」

能くいつた。スキツツル。私の一番いい馬を貸しませう。

ブルンチユリイ

いいや。あなたの馬は閉口だ。結構です。「ライナが端入つて来て、これからの言葉を聞く」さ、徒歩で戦はう。馬上は危険だ。といふのはつまり成らう事ならあなたを殺したくないからね。



第十一節

ライナ「心配して進んで出て」

ブルンチュユリイ大尉の仰しやつた事を聞いててよ。サアチャス。決闘しようといふのですつて。なぜ、「サアチャスは黙つて傍を向く、そして暖爐の所へいく。そこに立つてゐてあゝこの話をきいてゐる。ライナはブルンチュユリイに」何の事でのよ。

ブルンチュユリイ

知りませんよ。別わけはいはないんです。干渉なさるなお嬢さん。怪我なんかありませんよ。私は幾度も劍術の師匠をした事があります。あの人に少しだつてさわらせやしませんし、あの人に怪我もさせません。それですから説明の世話はいらないのです。明日の朝は國へ出立します。そしてあなたはもう私の事は見も聞きもしないでせう。あなたとあの人とは仲を直して、いつまでも幸福にお暮しなさるでせう。

ライナ「ひどく侮辱せられたやうに感じて顔を外向け、泣き聲になつて」

あなたに二度お目にかかりたいといつたおぼえはありません。

サアチャス「進み出て」

はあ。それが白状だ。

ライナ「威氣高に」

何ですつて。

サアチャス

あなたはその男を愛してゐる。

ライナ「侮辱を感じて」

サアチャス。

サアチャス

あなたは私の陰でその男に愛を許してゐて、同時にその男には私が言名附の夫だといふ事を隠してゐるのだ、ブルンチュユリイ。君は僕等の關係を知つてゐた。



しかも僕を騙した。僕が君を責めるのはこの點だ。敢て僕が受け得なんだ好意を君が受けたからではない。

フルンチュユリイ「憤つて飛び上つて」

黙り給へ。馬鹿な。僕はそんな好意なんか受けたおぼえはない。いいか、このお嬢さんは僕が妻帯してゐるかどうかさへも知りはしない。

ライナ「我れを忘れて」

まあ。「オットマンの上へ仆れて」さうなの、あなた。

サアチヤス

見たまへ、お嬢さんが大變だよ。フルンチュユリイ大尉。隠しても駄目だ。君は夜遅くこの女の寢室へ歡待される特權を享樂したのだ。

フルンチュユリイ「遮つて語氣荒く」

さうだよ。馬鹿。ピストルを頭に突附られて僕を歡待したのだ。君方の騎兵が僕を追駈て來たのだ。もしこの人が聲を立てたら、頭を打ち抜く所だつた。

サアチヤス「びつくりして」

フルンチュユリイがそんなことを。ライナ、それは本當ですか。

ライナ「怒つてゐながら嚴正な態度で」

本當でもないもんだ。

フルンチュユリイ

謝罪したまへよ、君。謝罪したまへ。「ミ再び机の前の椅子に戻る」

サアチヤス「腕を組んで舊式な口調で」

僕は決して謝罪は致さぬ。

ライナ「激して」

フルンチュユリイ大尉、これといふのもあなたのお友達の爲業しわざです。その人は私の事をこんなひどい話をいひふらしてゐるんです。「興奮して歩き廻る」

フルンチュユリイ

いいや、そいつは死にましたよ、焼死んだんです。



ライナ「驚いて立止まつて」  
 焼死んだのですつて。

フルンチュリイ

材木の置場で腰を撃たれたのです。それで抜出る事が出来ずにゐるうち、あなたの方の爆裂弾で材木に火が附いて、彼奴も焼死んだし、外に六人ばかりが同じ運命になりましたのさ。

ライナ

まあ、ひどい。

サアチヤス

馬鹿馬鹿しい事だ。戦争よ。戦争よ。愛國者と勇士との夢よ。詐偽だね、ブルンチュリイ、虚偽だ。戀愛と同じ事だ。

ライナ「怒つて」

戀愛と同じですつて。それを私にむかつていふの。

フルンチュリイ  
 そうです、サラノフ。あの事件はこれで説明が附いたでせう。

サアチヤス

それが虚偽だといふのです。ピストルの筒口を向けたといふ関係だけなら、君が又ここに歸つて来る譯がないではないですか。ライナは焼死んだ人の事は勘違へをしてゐるのです。私に密告したのはあの男ではないのだ。

ライナ

それぢや誰なの。「忽ち察して」ルウカですね。私の小間使の、私の奉公人の。あなたは今朝あの女と一所にいらしたのね、あの後ずつと。私は何といふ偶像を拜であたのだらう。「サアチヤスは愛想を盡かした女の様子を皮肉な喜びを以て見てゐる。ライナは益々怒つてサアチヤスに接近して、低いすつと強い調子でいふ」あなた御存じですか、私は二階へ上つたとき窓から外を覗いたのです、そして私の勇士を今一度見ようと思つたのです。さうしたら私に何だか能く判らない事を見てしまつたのです。今



分りましたよ、あなたはルウカを挑んでいらしたのですわ。

サアチヤス「苦い顔をして」

それが見えませんでしたか。

ライナ

ええ、よく見え過ぎたんでせうよ。「振向いて、中央の窓の下のダイランに身を投げる。全く失望してしまつたのである」

サアチヤス「皮肉に」

ライナ。二人の空想には蔭がさしてしまつた、人生は茶番ですよ。

ブルンチユリイ「ライナに、面白さうに」

そらね。この人はやつと自分が分つて來ました。

サアチヤス

ブルンチユリイ。僕は君に馬鹿といはせて置いた。更に卑怯者と呼んでもかまはない。君と戦ふのはお断だ。なぜだか分るか。

ブルンチユリイ

分らん。分らなくつてもかまはん。君があがあいつた時も僕は理由は尋ねなかつたのだから、君が静かになつたつても理由は尋ねない。僕は本職の兵隊であります。戦はなければならぬとなれば戦ふ、戦はずに済む事なら御免を蒙る。あなたはまだ素人だ。それで戦争を面白いものだと思つてゐるのだ。

サアチヤス

さういはなくつても。僕の理由を聞いて貰はう。戦争屋。理由はかうだ、戦争には二人人間が入る。本當の人間で、情もあり血もあり名譽も辨へてゐる人間がだ。僕は醜婦に戀する事が出來ないと同じに、君と戦ふ事は出來ない。君には引力がない。君は人間ではない。機械だ。

ブルンチユリイ「謝罪的に」

その通り、その通り。私はいつもさういふ奴なんでしたよ。誠にお氣の毒さま。しかし今は人生は茶番でなくつて、充分筋道の立つた眞面目なものだといふ事



が分つたのだから、あなた方のこれからの幸福に妨害はもうないぢやありませんか。

ライナ「立上つて」

あなたは私とあの人の幸福なんて事におせつかいなさるけれども、この人の新しい戀人をお忘れなの。ルウカよ。今度この人が戦ふのは相手はあなたぢやなくつて、競争者のニコラですわ。

サアチヤス

競争者。「自分の額を打つ」

ライナ

知らないの。二人が約束してゐるのを。

サアチヤス

ニコラか。又おとし穴か。ニコラめ。

ライナ「ひやかすやうに」

むごたらしい犠牲ぢやなくつて。あんな別嬪を、あんな利巧者を、あんなしこやかな兒を中年者の奉公人にやつてしまふなんて。本當よ、サアチヤス。ぼんやりしてゐてそんな事をさせてはいけませんよ。あなたの武士道にないわ。

サアチヤス「自制しきれなくなつて」

畜生。畜生。「怒つて部屋中を荒れ廻る」

ブルンチュユリイ

おい、おい君、君がなかで一番貧乏籤を引いたね。

ライナ「益々怒つて」

ブルンチュユリイ大尉。この人が爲た事をあなた知つてて。この人はある娘を私どもの探偵にして置いたのです。そしてその報酬にこの人は女を挑んだのです。

サアチヤス

いい加減な。丸で嘘だ。

ライナ



丸で嘘。「面もかかって」ルウカがあなたにブルンチュユイ大尉が私の部屋にゐた事を話した事も、さうぢやないといふのですか。

サアチヤス

さうはいひません。けれども。

ライナ「遮つて」

その話をきいた時、あなたがあれを挑んで居た事も否定なさるの。

サアチヤス

いえ。それはその。

ライナ「輕蔑したやうに言葉を遮つて」

もう何も仰しやる必要はありません。それだけ聞けば澤山です。「振返つてサアチヤスから離れ、大おほやう様に窓際に歸る」

ブルンチュユイ「サアチヤスが面目を失して苦痛に堪へず、オットマンに身を投げて

両手で額を抑へてゐるのを見て靜かに」

それだから貧乏籤だとさつきいつたんですよ。

サアチヤス

山猫め。

ライナ「むかむかとしてブルンチュユイの所へ走りゆき」

この人は私の事を何とか悪體をいひましたらう。あなた聞いて。

ブルンチュユイ

悪體でも衝くより外に爲やうがありませんや。ねえ。ごうにかして防戦しなくてはなりません。さあ。「宥めるやうに」喧嘩してはいけません。何にもなりませんよ。「ライナは息を切らしてオットマンに据わる。そして膨れ面をしてブルンチュユイを見てゐてやうさ思つたが、可笑さに堪へられなくなつて笑ひ出す」

サアチヤス

ニコラと約束してゐる。「立上つて」は、は、は。「暖爐に行き、背中をそれに向けて」成程なあ。君がこんな大虚偽を平氣で聞いてゐるのはもつともだ。



ライナ「アルンチュリイの心裡を直覺的に推察して、嫌味で」

あなたはきつと二人をば大きな赤ん坊と思つていらつしやる。きつとさうです。

サアチヤス「變的な擧め面をして」

さう思つてゐる。さう思つてゐる。スキツツルの文明でブルガリヤの蠻風をあやしてゐるのだ。

アルンチュリイ「赤面して」

どうして、どうして。そんな事は決してない。私はおふたりが落着いてさへ下さればそれが嬉しいのです。さあ、さあ。心持よくして、お互に仲好く相談しませうや、今ひとりの婦人はどこにゐるのですか。

ライナ

戸口で立聞を致して居ります。多分。

サアチヤス「彈に打たれたやうに慄ひ上つて、靜ではあるがひどく憤慨した口調で」

少くもそれだけは讒誣だといふ事を證明しませう。「威を作つて戸口に行き開く。外に首

を出すと思ふさ、ひどい叫び聲をする。戸の外へ飛び出して、ルウカを引抱へて歸つて来る。そしてルウカを手荒く机の方へ突飛して怒鳴る「こいつを審さばいてくれ。冷靜な公平なブルンチュリイ君。この立聞たちぎき女め郎らうを審さいてくれ。「ルウカは其場に無言で傲慢な態度で立つてゐる」

## 第十二節

アルンチュリイ「首を振つて」

私には裁判は出来ません。さういふ私がテントの外で立聞した事がある。その時は暴動が起らうといふのであつた。まり内容の程度によります。私の時は自分の命が危ふい處だつたんでね。

ルウカ

私のは戀愛が危くなつてゐたのです。「サアチヤスは恐縮する。平氣であようと思つても極りが悪い」私は羞かしい事とは思ひません。

ライナ「輕蔑して」



お前の戀愛だつて。お前の物好ものずきの事なんだらう。

ルウカ「向き直つて、輕蔑せられたのを利息をつけて押返して」

私の戀愛は、あなたのお感じ遊ばす事よりもずつと強いのですよ。あなたがチヨコレエト兵隊の事をお思ひになるよりも強いのですよ。

サアチヤス「直に疑を起してルウカに」

それは何の事だい。

ルウカ「強く」

それはかういふ事なんですよ。

サアチヤス「何の事がさいふ風に遮つて」

ああさうさう。アイスブデンの事か。たあいもない悪口だ。「ペトコフ少佐がシャツ姿で端入つて来る」

### 第十三節

ペトコフ

諸君、シャツのまままで失敬。ライナや、誰か己の上着を着て居たな。きつこさうだよ、何でも己より肩幅の廣い奴だ。背中が皆なはち切れてゐる。お母さんが直してゐるが、早くしてもらひたいものだ。風を引きさうだ。「注意して皆の様子を見る」何かあつたのかね。

ライナ

いいえ。「落着いた様子で暖爐の前に据わる」

サアチヤス

いいえ何にも。「最初の通りに机の一端に据わる」

フリンチユリイ「据わつたまま」

何でもありませんよ。何でも。

ペトコフ「前のやうにオットマンに腰をかけて」

そんなら宜いが。「ルウカを見附」ごうかしたのか。

ルウカ



いいえ。

ペトコフ「喜んで」

そんなら宜いが。「嘘をして」お前奥さんの處へいつて上衣をもらつて来ておくれ。

「ルウカ畏まつて出やうとする。ニコラが丁度上着を持つて端入つて来る。ルウカは用のあるやうな振をして、水煙管の載せてある小テエアルを窓に近い壁際に運びなごしてゐる」

ライナ「ニコラが上着を持つてゐるので急に立上り」

来てよ、お父さん。私におよこし。それからお前はもつと火をお焚きな。「上衣を受取り、少佐の所へ行く。少佐は着るつもりで立つてゐる。ニコラは火をよくしてゐる」

ペトコフ「ライナに愛情を含んでからかふやうに」

ははあ。戦争から歸つた日だけは、年をとつたお父さんを大層よくするな。

ライナ「改まつて詰るやうに」

まあ、どうしてそんな事を仰しやるの。

ペトコフ

いいさ、いいさ。ほんの常談だよ。さあ、キツスしてお呉れ。「接吻する」上着をおくれ。

ライナ

いいえ、私が着せてあげるのよ。そつちをおむきなさい。「背中を向けて、腕のべ後やつて袖を捜す、ライナは手ばやく寫真をかくしから抜取つてアルンチュリイの前の机へ投げる。アルンチュリイはサアヂヤスの鼻の先で書類でそれを匿す。サアヂヤスは呆れてゐたが、疑惑は極點に達してゐるライナはペトコフに上着を着せる」これで工合がようござんすか。

ペトコフ

結構。有り難うよ。「据わる。ライナは暖爐の傍の席へ戻る」おう、それはさうと、おかしなものを見附けたよ。どういふ別<sup>べつ</sup>なんだか。「ライナが抜取つたかくしに手を入れて」お、はてな。「他のかくしを見る」確かにあつたのだが。「面喰つて胸のかくしを探す」おかしいぞ。「最初のかくしを探して」どうしたらう。「思ひ當る所があつて、立上つて叫ぶ」お母さんが取つちやつたんだよ。



ライナ「真赤になつて」

何を取つたのよ。

ペトコフ

お前の寫真だよ。字が書いてある。ええ何だつたつけない、ライナより。チヨコレエト兵隊へ。記念のため。かね。どうも讀んだ處よりも文言以外にもつと別がある事なんだらう。一つ判じて見ようと思つて。「呼ぶ」ニコラ。

ニコラ「薪を落して振向き」

へい。

ペトコフ

お前はけさお嬢さんの拵へたものを何か毀したか。

ニコラ

お嬢さんが手前が毀したと仰しやつたのをお聞きなりましたと存じます。

ペトコフ

それは聞いたよ。馬鹿。本當かといふのだ。

ニコラ

お嬢さまは嘘など仰しやる方ではないと存じて居ります。

ペトコフ

さうか。己はさうは思はん。「昔に向ひ」さあ、己に事が分らんと思つてゐるかね。

「サアヂヤスの側へ行き肩を叩いて」サアヂヤス。君がチヨコレエト兵隊か。

サアヂヤス「突立つて」

私がチヨコレエト兵隊。無論違ひます。

ペトコフ

違ふ。「皆を見廻す。皆は眞面目くさつて白らける」それではライナがほかの人に記念の寫真をやつたといふのだね。

サアヂヤス「謎のやうに」

世の中は我我が考へてゐたやうな無邪氣なものではありませんよ。



フルンチュリイ「立上つて」

もう分りました。少佐。私がチヨコレエト兵隊です。「ヘトコフもサアヂヤスもびつくりする」この美しいお嬢さんは私が飢<sup>ひも</sup>じかつた時にチヨコレエト・クリイムを下すつて私を救つたのです。その味は決して忘れません。私の死んだ友達の新ユトルツがピイロツトでその話をしたでせう。私とその逃亡兵なのです。

ヘトコフ

君が。「せいせいいつて」サアヂヤス。君がけさあの話をしたときこの女共が取つた態度をおぼえてゐるかい。「サアヂヤスは意地悪さうに笑ふ。ヘトコフは嚴格になつてライナに向ひ」お前は立派な婦人だよ。さうだなあ。

ライナ「悲しい顔をして」

サラノフ少佐は氣が變つたのです。そして私が寫眞へあれを書いた時は、ブルンチュリイ大尉が妻帯しておいで<sup>の</sup>事を知らなかつたのです。

フルンチュリイ「驚いて大に反對して」

私は妻帯しては居りません。

ライナ「非難して」

あなたはしてゐると仰しやいました。

フルンチュリイ

いひません。確かにいひません。私は未だ嘗て結婚した事はありません。

ヘトコフ「激して」

ライナ。聞いて宜いか悪いか知らないが、ごつちの紳士と約束をしたのか聞かせてもらひたいのだが。

ライナ

どちらでもありません。この若い婦人が「ミルウカを紹介するミ、ルウカは一同に對し傲然と構へる」只今ではサラノフ少佐の愛情の對象物なのです。

ヘトコフ

ルウカだ。サアヂヤス、君は氣が違つたか。この女はニコラと約束してゐるん



だぞ。

ニコラ「進み出て」

失禮でございますが、それは少し相違致して居ります。ルウカは私と約束をしては居りません。

ヘトコフ

約束をして居らん。嘘衝。いいか、約束した日に己から二十五レツもらつたぢやないか。さうしてルウカはその腕輪をライナからもらつたぢやないか。

ニコラ「落着き拂つて」

それはさう申し上げて置きました。それもただルウカを保護する爲でございます。この女は身分よりもずつと氣位が高いのでございます。私などはこの女には氣心の知れた召使位のものでございます。御承知の通り私は近ちかぢかにソフイヤに店を出す積でございますが、この女があなた方へお嫁入をされましたら、御最負にもなり、お引立も願はうと思つてゐるのでございます。「分別ありげに出て

行く。二同後を見成る」

第十四節

ヘトコフ「沈黙を破つて」

よし。己はかうだ。

サアチヤス

あの男の態度は非常に立派な男氣のやうでもあるし、氣持のわるいほど陋劣のやうでもある。ごつでせう、ブルンチユリイ。

ブルンチユリイ

男氣だらうが、陋劣だらうが構ひませんや。ニコラは私の知つてゐるブルガリヤ人の中で、一番利巧な人物です。あいつにフランス語とドイツ語とが話せたら、ホテルの支配人にしてやります。

ルウカ「突然サアチヤスに食つてかかつて」



私は皆さんから侮辱されました。お手本を見せたのはあなたです。私にあやまつて下さい。〔サアチヤスは爲掛のぜんまいを放したやうに直に腕を組む〕

フルンチユリイ〔サアチヤスが口を切る前に〕

それは無駄だ。この人は決して謝罪しない。

ルウカ

それはあなただからです。同等の方で、そして敵だからです。しがない奉公人の私にはあやまらないといふ事はありません。

サアチヤス〔賛成して〕

本當だ。〔仰山な態度で跪いて〕許して下さい。

ルウカ

許します。〔手をそつミ出すミ、サアチヤス接吻する〕かうお觸りになつたからは、私はあなたの花嫁ですわ。

サアチヤス〔飛び上つて〕

おう。うつかり忘れてゐた。

ルウカ〔冷かに〕

御都合でお見合せなさいまし。

サアチヤス

見合せる。なんの。お前は己のものだ。〔ルウカを抱く。ルウカがサアチヤスの腕に抱かれて、一同が大に驚いてゐる處へカザライン端入つて来る〕

## 第十五節

カザライン

これは何といふ事です。〔サアチヤスはルウカを抱いてゐた手を離す〕

ペトコフ

サアチヤスはライナの代りに、ルウカと結婚する事になるらしい。〔カザラインは、憤然としてペトコフに喰つてかかる程になるのをペトコフは大聲で止めて〕己におこるな、己の



知つた事ぢやない。「暖爐の處まで引さがる」

カザライン

ルウカと結婚おしだど。サアヂヤス。あなたは私ごもに約束で縛られてゐますよ。

サアヂヤス「腕を組んで」

何にも縛られてゐる事はありません。

フルンチユリイ「常識的な一言が氣に入つて」

サラノフ。君の手を。祝意を表しますよ。君の英雄的な性分もどうとう實際的な方面が出て來ましたね。「ルウカに」立派な若い御婦人。共和國民からお祝をします。「ルウカの手に接吻する、ライナは頗る不満である」

カザライン「威すやうに」

お前はしやべつたんだね。

ルウカ

私はライナに濟まないやうな事は致しません。

カザライン「傲慢に」

ライナだつて。「ライナも同様にこの無禮を憤る」

ルウカ

私はこの人をライナと呼ぶ権利がありますわ。この人は私の事をルウカと呼ぶのですもの。私はサラノフ少佐にかう申したのです。スキツツルの紳士が歸つて見えたら、ライナは少佐と結婚はなさりますまいと申したのです。

フルンチユリイ「驚いて」

ひよう。

ルウカ「ライナに」

あなたはサアヂヤスよりも、この人の方をお好きだらうと思つたのですわ。私の考が本當かどうか御自分が一番よく御承知の筈です。

フルンチユリイ



ええ馬鹿な事を。少佐、奥さん、本當の事を申し上げます。この御婦人はただ私の命を救つて下さつた丈で、他に何もないのです。私などは何とも思つてゐられません。まあ何といつたつて、お嬢さんを御覽なさい、そして私を覽なさい。お嬢さんは金持で、年が若くて美しく、お伽噺の皇子や高尚な人間や騎兵の呐喊やそんな風な事で頭が一杯になつてゐる空想家です。私といつたら平凡なスキツツルの兵隊で、十五年もバラツクや戦争の生活をしてゐた爲めに、上品な生活なんといふものは分らない人間です。いつでも慢性の奇抜好な氣質のお蔭で、向きかつた運を打毀してしまふ浮浪人です。

サアチヤス「針で刺された様にドキとして、不審さうにフルンチュユリの言葉を述べ」

失敬ですが、何が君の運を打毀したといつたつけね。

フルンチュユリ

慢性の感情的な氣質ですよ。私は小僧の時分に二度まで家を飛び出しました。

親父の商賣はおぼえないで軍隊へ端入つたんです、分別のある者なら手近の穴倉へでも潜り込まうといふ處を、私はこちらのバルコニイを這登つたり、お嬢さんを今一遍見たさに又ぞろここまで歸つて來たりしました。外の男ならこの年配になれば上着は使で送り返すのですがね。

ペトコフ

己の上着の事だ。

フルンチュユリ

左様。その上着の事をいつてゐるのです。使で送り返して自分は平氣で内へ歸つてゐる處です。私を若い娘が惚れさうな男だと想像しますか。私の歳をおききなさい。私は三十四です。令嬢は十七を餘計越してゐると思へません。

「この計算には一同が驚いて、互に顔を見合せてゐる。フルンチュユリは無邪氣に話しつづける」私にとつては死ぬか生きるの冒険も、こちらには學校生徒の遊戯同然だつたのです。チヨコレエトクリイムや隠れん坊といふ様な別でした。ここに證據があります。



「ミテエアルから寫眞を取出して」一つ伺ひますが、あの事件を眞面目に取つた婦人が、私にこれを贈つて而もそれに「ライナより。チヨコレエト兵隊へ。記念のため。」といふ様な事を書くとお思ひですか。「彼は勝誇つて寫眞を皆に見せる。議論は駁論の餘地なき迄に解決したかのやうである」

ペトコフ

それを己が搜してゐたのだ。どうして其處にあるのかなあ。

フルンチユリイ「ライナに、得意で」

お嬢さん。萬事方を附けたつもりですが。

ライナ「制しきれぬ苦悶をもつて」

あなた自身に關する事は方が附いたと思ひます。あなたは感情的な馬鹿です。

「フルンチユリイがよつとさする」以後は十七歳の女生徒と二十三歳の婦人とお見わけなさるやうに願ひます。

フルンチユリイ「驚いて」

二十三。「ライナは怒つて男の手から寫眞をもぎとり、引千切つて男の脚下へ投付る」

サアチヤス「競争者の狼狽を苦笑しながら」

君に對するたつた一つの信用は駄目になつた。君の聰明も外の事と一所にやはり偽物だね。君は僕よりも感が悪い位だ。

フルンチユリイ「敗北して」

二十三。二十三かなあ。「考へる」ふむ。「速かに決心して」ペトコフ少佐、さういふ事なら私はサラノフ少佐が手を引かれたその後へ、お嬢さんの婿になる事を表立つて申し入れます。

ライナ

あなたさうして。

フルンチユリイ

今日の午後にあなたが色色私に仰しやつた時に、本當にあなたが二十三歳であつたとすると、私はあなたのお話を眞面目にとります。



カザライン「高ぶつた鄭寧で」

あなたは娘の身分と、それから取つて代らうとなさるサアチヤス・サラノフ少佐との身分がよくお分りになつてゐますかね。ペトコフ家とサラノフ家とはこの國で一番有福な一番高い家柄で通つてゐるのですよ。私どもの家柄は歴史的になつて居りまして、もう廿年程になりますのです。

ペトコフ

そんな事はかまはんぢやないか。「ブルンチュユリイに」君の身分の事だけならばそれで結構なだけけれど。厄介な事にはライナは贅澤な暮になれてゐるのでね。サアチヤスは馬を二十頭も持つてゐるのだよ

ブルンチュユリイ

二十頭の馬をどうしようといふのです。それでは丸で曲馬です。

カザライン「手きびしく」

娘は上等の厩を使ひつけて居りますよ。

ライナ

しつ。お母さん。私が馬鹿に見えてよ。

ブルンチュユリイ

暮の問題になつて來たのなら、さあ、よろしい。「勢よく机の處に行き青い封筒の中から書類をきつて」馬が何頭と仰しやいましたね。

サアチヤス

二十頭です。スキツツルの紳士。

ブルンチュユリイ

私は二百頭あります。「一同驚く」馬車は何臺。

サアチヤス

三臺。

ブルンチュユリイ

私は七十臺。その内廿四臺は、中に十二人御者臺に御者と車掌とを別にして二



人乗れます。テエブル掛は何枚ありますか。

サアチヤス

そんな事が分るものか。

フルンチユリイ

四千枚ありますか。

サアチヤス

ない。

フルンチユリイ

私の處にはある。シイツとケットが九千六百對。羽根蒲團が二千四百枚。ナイ  
フとフォオクが壹萬挺。デザアト・スブンが同じだけ。奉公人が六百人。御殿風  
の建物が六ヶ所。其外に貸厩が二棟。茶庭が一ヶ所。私宅が一軒。特殊の功勞  
に對する勳章が四個。士官の位と紳士の位置とを持つてゐます。それから自分  
の國語が三種。これだけを提供し得る人がこのブルガリヤにありますか。

ベトコフ「子供らしい驚き方をして」

あなたはスキツツルの皇帝ですか。

フルンチユリイ

私の地位はスキツツル人が最も尙ぶ所のもので、平民です。

カザライン

そこでブルンチユリイ大尉。娘がお眼金に叶つたとすれば、私はあれの爲合しあはせを  
邪魔しやうとは思ひません。「ベトコフ何かいはうとする」ベトコフ少佐もさうお考へ  
です。

ベトコフ

己は結構なんだよ。馬が二百頭。ひよう。

サアチヤス

當の御婦人は何と仰しやるかな。

ライナ「態々むつつりして」